

# 蘇我氏の祖は百済人だ

飯田眞理

【はじめに】飛鳥時代における最大の氏族といえば、蘇我馬子に代表される蘇我氏である。ところがその蘇我氏の人物として、実在が確かなのは、馬子の父である稲目で、それ以前については謎なのである。記紀においては、蘇我氏の始祖は孝元天皇の三世孫の武内宿禰とされる。葛城氏・平群氏・巨勢氏・紀氏なども武内宿禰を始祖としており、これらの系譜は創作の可能性が高い。では蘇我氏の出自はどこで、どのような人物が蘇我氏の先祖であったのだろうか。

門脇禎二氏は1971年に蘇我氏渡来人説を提唱した。履中紀に記される「蘇我満智宿禰」は応神紀に記される百済の高官「木満致」や『三国史記・百済本記』に記される「木苧満致」と同一人物とする説である。しかし現在、学会では、この説は完全に否定されているとのことである。その理由は、「蘇我満智宿禰」と「木満致」と「木苧満致」の3人の年代が一致しないことや、渡来人説の根拠が弱いことらしい。

そして、現在蘇我氏の出自としては、「大和国高市郡曾我説」「大和同葛城説」、「河内国石川郡説」の3説があるとのことである。筆者は今回、それらの説の方々の書物を読んで詳しく検証した。その結果、むしろ、非渡来人説こそが、根拠が弱いものであることがわかった。また、「蘇我満智宿禰」が「木満致」や「木苧満致」と同一人物であることも十分に成り立つこともわかった。さらに、蘇我氏と百済との強い関係や、蘇我氏の発祥の地が百済王族が居住していた河内石川付近などであることなどにより、蘇我氏の祖が百済王族であることを結論することができた。以上について、詳しく述べる。

## 1. 蘇我氏の祖・満智宿禰の年代を検証する

【はじめに】第4章で述べるが、稲目・馬子の事績は詳しく記されていて、蘇我氏は倭国の発展に大きく貢献したことが記されている。それを読むと、蘇我氏は、百済との関係が強いことや、多くの渡来人を配下にしてきたことがわかる。しかし不可解なことに稲目の父親については一切記されていない。また蘇我氏の出自についても明確には記されていない。ただ、日本書紀の履中紀に蘇賀満智宿禰が記されている。そしてこの満智宿禰が、応神25年に記す百済の官人木満致であるように記している。蘇我氏渡来人説を否定する方々は、年代の矛盾などにより、蘇賀満智宿禰は信頼性がなく後世に創作されたとする。そこで、この蘇賀満智宿禰が百済官僚の木満致であるかどうかについて検証することにする。

### (1) 蘇我氏の祖に関する文献資料

★まず、蘇我氏の始祖であり、武内宿禰の子とされる「石川宿禰」は応神3年に記される。

《応神3年(392年)》この年、百済の辰斯王が立った。貴国の天皇に礼がなかった。それで

紀角宿禰・羽田矢代宿禰・石川宿禰・木菟宿禰を派遣して、その礼がない現状を問い詰めた。すると百済の国は辰斯王を殺して謝った。紀角宿禰たちは代わりに阿花を立てて王とした。

★そして、問題の百済官僚の木満致は、その後の応神 25 年に記されている。

《日本書紀・応神 25 年 (414 年?)》

百済の直支王が薨じた。その子・久爾王が王となった。王は年が若かったので、木満致が国政をとった。王の母と通じて無礼が多かった。天皇はその暴を聞いて(倭国に) およびになった。

—百済記によると、木満致は木羅斤資が新羅を討ったとき、その国の女を娶って産んだところである。その父の功を以って、任那を専にした。わが国(百済)に来て日本と往来した。職制を賜わり、わが国の政を採った。権勢盛んであったが、天皇はそのよからぬことを聞いて呼ばれたのである。

★木満致の父とされる「木羅斤資」は神功紀にも記されている。

《神功 49 年 (369 年)》荒田別・鹿我別を将軍とした。久氏(百済人)たちと共に兵を整えて……新羅を襲おうとした。……木羅斤資・沙々奴跪に命じて、新羅を撃ち破った。木羅斤資・沙々奴跪の二人はその姓が分からない。ただし木羅斤資は百済の将である。……それで百済の王の親子と荒田別・木羅斤資たちは、共に意流村で会った。

★木羅斤資は朝鮮系史料には記されないのが疑わしいが、木満致の方は実在したことは間違いのないであろう。というのは、三国史記に木満致と思われる人物が記されているからである。

《三国史記・百済本記、蓋鹵王 21 年(475)年》

高句麗王の長寿王は兵三万で、王都の漢城を陥し、蓋鹵王を殺した。文周は木苧満致・祖彌桀取とともに南へ行った。」

★百済の姓は複姓であるが、日本書紀では木満致の父を「木羅斤資」と記している。よって木満致は木(苧)満致のことである。問題は木苧満致＝木満致が倭国にきたかどうかであるが、木満致と同一人物を推測させる蘇賀満智宿禰が履中紀に記されている。

《履中 2 年 (440 年ころ)》

平群木菟宿禰、蘇賀満智宿禰・物部伊苕弗大連・円大臣らは、共に国政に携れた。

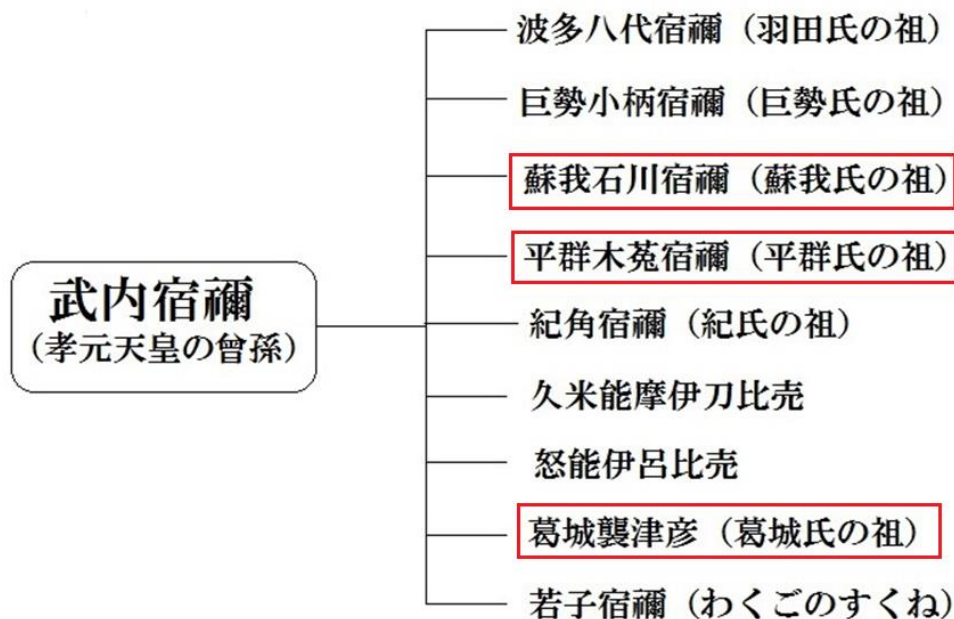
★ここで年代に矛盾がある。『日本書紀』の「木満致」は、応神天皇 25 年 (414 年) で、『三国史記・百済本紀』の「木苧満致」は蓋鹵王 21 年 (西暦 475 年) で、時代が異なることである。さらに履中紀の蘇賀満智宿禰は 440 年ころである。蘇我氏渡来人説を否定する専門家はこの年代矛盾を大きな根拠とする。しかし、蘇賀満智宿禰が 475 年頃の人物とする日本の史料が存在するのである。

『古語拾遺』の雄略天皇の条には、「蘇我麻智宿禰をして三蔵を検校しめ、秦氏をしてその物を出納させ、東西の文氏をして、その簿を勘録せしむ。」と記されている。つまり、蘇我麻智宿禰は

雄略大王時代の人物ということで、三国史記の木苧満致の年代（475 年）と合致する。日本書紀の木満致の年代が間違っているのである。なぜなら、日本書紀には様々な年代矛盾があるからである。（後に詳しく解説するが、倉本一宏氏は古語拾遺の記述は、後世に蘇我倉氏によって創作されたとするが、その根拠はほとんど記されていない。倉本氏は自説に都合悪い史料を、弱い根拠でもって後世の創作とするように感じている。）

## (2) 日本書紀の年代矛盾について

①蘇我氏の祖の年代を考察するには、武内宿禰およびその子とされる各氏族の祖の活動年代を検証する必要がある。以下にそれを示す。



### 【武内宿禰】

成務天皇と同じ日生まれ。仲哀 9 年（310 年前後）・神功 47 年（367 年）・応神 9 年（398 年？）に活躍が記される。

### 【石川宿禰】

応神 3 年（392 年）に一度だけ記される。

### 【木満致・蘇賀満智宿禰】

応神 25 年（414 年）と履中 2 年（440 年ころ）に記される。

### 【葛城襲津彦】

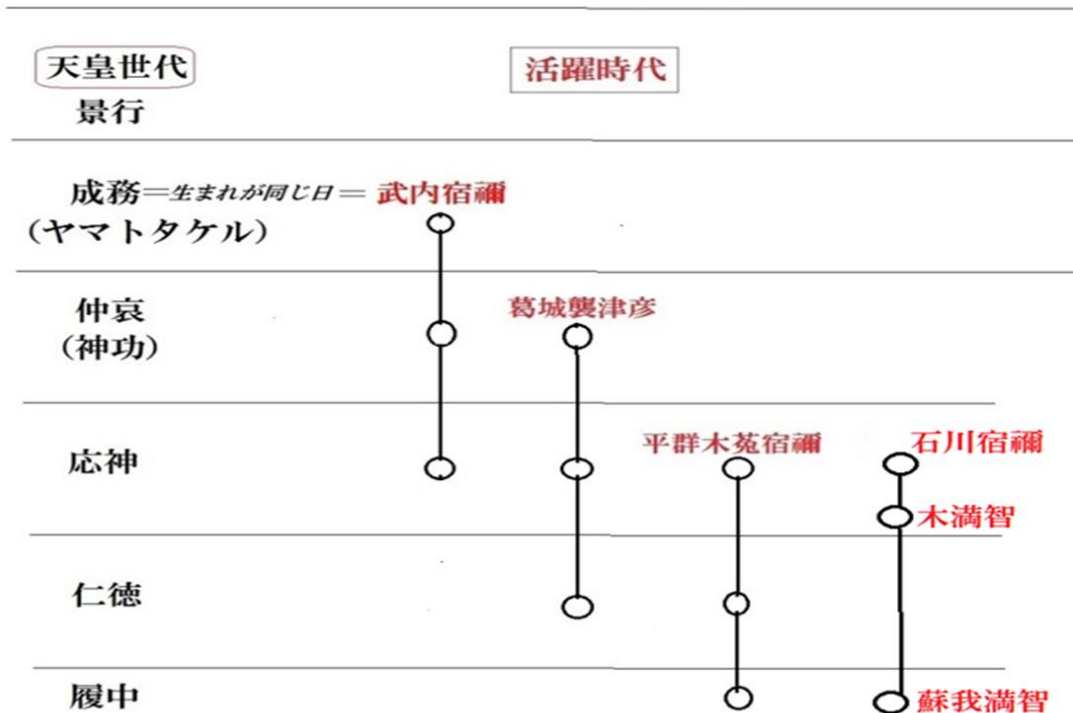
神功 5 年（325 年）・神功 62 年（382 年）・応神 14 年（403 年）・応神 16 年 [405 年]・仁徳 41 年に記される。

### 【平群木菟宿禰】

応神 3 年（392 年）・応神 16 年 [405 年]・仁徳元年（410 年ころ）・履中 2 年（440 年ころ）に記される。

【紀角宿禰】 応神 3 年（392 年）・仁徳 41 年（430 年ころ）に記される。

★これらを表にすると下図のようになる。



★日本書紀では、天皇在位年は、神功は69年、応神は41年、仁徳は87年、履中は6年とされている。この年代からは、2世代にわたり活動するのはあり得るが3世代はあり得ない。ただし、神功—応神—仁徳—履中は全て親子とされていて、この在位年はあり得ないことである。筆者は、神功紀に記す百濟の記事から判断すれば、神功は389年に亡くなったと考えている。神功元年は320年として年代を推定する。(神功皇后が存在したかについては別) また、筆者は、仁徳は倭の五王の「讚」にあたると考えているので、履中の即位年は440年くらいであったと考える。これを元にしても、武内宿禰は約100年間、葛城襲津彦は約80年間活躍したことになる。これもあり得ないことである。つまり日本書紀はこの時代の年代については、矛盾があることがわかりながら記しているのである。

★なぜこのような年代矛盾があることになったのか。その年代矛盾の元は、[神功皇后と武内宿禰の中心年代を、七枝刀の近肖古王の時代である4世紀後半とした](#)ことであると考え。一方で、各氏族の伝承を元にして、葛城氏、蘇我氏、平群氏、紀氏などの始祖を武内宿禰につなげる系譜が出来上がっていた。よって、葛城襲津彦や石川宿禰と木満智・平群氏の活躍時代を、神功～応神時代(4世紀後半～5世紀初頭)とせざるを得なかった。このことにより、彼らの活躍年代が古くなってしまったのである。

★葛城襲津彦は、仁徳の皇后の磐之媛の父親なので、応神～仁徳(400年～430年ころ)の時代の人物であり、神功時代(320年～389年)の人物ではない。活躍開始が約60年ほど古くされている。平群木菟宿禰(392年～443年)も、雄略大王時代(465年～489年ころ)に登場する平群真鳥の

父親とされているので、実際は允恭大王時代（445年～460年ころ）の人物と考えられる。これも50年前後古くなっている。

★その他日本書紀が、活動年代を遡らせたのは蘇我氏・葛城・平群氏だけではない。物部大前宿禰は履中紀に登場し始めるが、『先代旧事本紀』では物部大前宿禰連公は安康天皇のときにはじめて大連となったと記す。物部目連も日本書紀は雄略時代に大連であったとするが、先代旧事本紀では清寧時代に大連とする。日本書紀ではいずれも一世代古くなっている。

②上記のことを元にして、そして問題の蘇我氏の祖の年代について考察する。

★日本書紀以外の史料では、蘇我氏の系譜は次のようである。『紀氏家牒』や『公卿補任』などに所収されている「蘇我我氏系図」では以下のように書かれている。

\*『公卿補任』では、

蘇我石河宿禰—満智宿禰—韓子—高麗—稻目

\*『紀氏家牒』では、

蘇賀石河宿禰—満智宿禰—韓子宿禰—馬背宿禰（亦に曰ふ高麗）—稻目宿禰

\*『古事記』の「建内宿禰」の系譜では、

建内宿禰—蘇賀石河宿禰 とされる。

これらを合わせると

「武内宿禰—蘇賀石河宿禰—蘇我満智宿禰—韓子—高麗（馬背）—稻目」ということになる。

この系譜が信頼できるかどうかについては保留して、とりあえずこの系譜を元にして、蘇我満智宿禰（木満致）の実年代を探ることにする。

★実在が間違いないとされる蘇我稻目は欽明32年571年没で、用明、崇峻、推古の母方の祖父であることより、506年頃生まれたとされている。

\*そこで、一代20年として先祖たちの生年を推測すると

高麗（486年生れ）—韓子（466年生れ）—満智（446年生れ）となり、

\*一代25年として推測した場合は

高麗（481年生れ）—韓子（456年生れ）—満智（431年生れ）となる。

そうすると、蘇我満智は475年には29～44歳という壮年であることになり、三国史記・百濟本記の475年に記される「木苧満致」の年代(475年)と合致する。これは『古語拾遺』の雄略紀に記す「蘇我麻智宿禰」とも年代が合致することになる。蘇我満智宿禰（木満致）が木苧満致と同一人物であることは否定できなくなる。ところが、日本書紀における蘇賀満智宿禰（木満致）の活躍年代は、応神25年～履中3年（414年～440年ころ）になっており、『古語拾遺』の蘇我麻智宿禰の年代（480年ころ）よ30～60年古くなっている。つまり日本書紀は、葛城襲津彦や平群木

菟宿禰と同じように、蘇我満智宿禰（木満致）の活躍年代を 50 年前後古く記しているのである。以上の検証により、蘇我氏の祖の蘇我満智宿禰が百濟官僚の木苧満致（木満致）であることの真実性が高いことがわかる。

★ただ、日本書紀の記述には、悩ましいことが一つある。それは「石川宿禰」と「木羅斤資」との関係である。蘇我氏の系譜では、蘇我満智宿禰の父は石川宿禰である。ところが応神 25 年の百濟記の引用では、木満致は木羅斤資と新羅の女との子であると記されている。これでは「蘇我満智宿禰」と「木満致」は、父親が違うことになり、別人になってしまう。これはどのように考えればよいのだろうか。これについて、次のようなことが考えられる。

- (A) 「石川宿禰」と「木羅斤資」はどちらも実在の人物であり、木満致と蘇我満智宿禰は別人だった。
- (B) 「石川宿禰」と「木羅斤資」はどちらも創作上の人物であり、別々に異なる時代に創作されたため、結果的に矛盾が生じてしまった。蘇我満智宿禰の父を「石川宿禰」として創作して、武内宿禰の系譜につなげた。一方、実在の「木満致」を貶めるために、「木羅斤資」が新羅の女を娶って生まれたとして創作した。
- (C) 「木羅斤資」の子が木満致（木苧満致）であったのは史実であるが、「石川宿禰」は、蘇我氏の先祖として武内宿禰の系譜につながるように、後に加えられた架空の人物である。
- (D) 「木羅斤資」と木満致（木苧満致）は実在だが、石川宿禰や蘇我満智宿禰は蘇我氏の系譜をつくる時に創作された架空の人物である。

★上の 4 つのうち、どれが適切なものであるか、筆者は以下のように考える。

\*木満致は、三国史記に記す実在した木苧満致に間違いはない。また、既に論証したことであるが、蘇我満智宿禰は木満致（木苧満致）と同一人物である。（よって A と D は成り立たない）

\*「木羅斤資」は百濟の史料には一切記されない。また、日本書紀の神功 49 年の記述は、史実とは思われない。よって「木羅斤資」は日本書紀に創作された人物と考える。

\*次に、「石川宿禰」だが、これは蘇我氏の系譜のトップとして、武内宿禰の系譜につなげた創作上の人物であると考え。その根拠の一つは、応神 3 年の記事には「この年、百濟の辰斯王が立った。・・それで紀角宿禰・羽田矢代宿禰・石川宿禰・木菟宿禰を派遣して、・・」とある。ここには武内宿禰の系譜につながる 4 人の名が記されているが、「石川宿禰」だけはこの記事だけなのである。残りの三人は、仁徳～履中紀にも記されている。根拠の二つ目は、蘇我満智宿禰＝木満致を前提にするのであるが、百濟官僚の木満致（蘇我満智宿禰）の父が、倭国人の「石川宿禰」であることはあり得ないことである。

★以上の考察より、(B) が適切である。ただ、(C) の可能性もあると考えている。いずれにしても、「石川宿禰」は架空の人物であり、蘇我氏の先祖が木満致（木苧満致）であったことは、間違いないと考える。

## 2. 蘇我氏の祖・非渡来人説は根拠がない

### (1) 蘇我氏渡来人説は否定できない

★ (Wikipedia) では以下のように記載されている。

「蘇我氏渡来人説とその否定：門脇禎二が 1971 年に蘇我氏渡来人説を提唱した。門脇が提唱したのは応神天皇の代に渡来した、百済の高官、木満致と蘇我満智が同一人物とする説で、鈴木靖民や山尾幸久らの支持を得た一方、加藤謙吉や坂本義種らが批判したように、史料上の問題点が多い。文化や政治の源流を何でも朝鮮諸国に求めると言った 20 世紀後半の風潮の中で提唱されており、根拠が不十分であるという指摘がある。現在では蘇我氏渡来人説は否定されている。木満致と蘇我満智を同一人物であると実証することには問題点がある。」

問題点とは次のことである。

- (a) 「木満致」の名が見える『日本書紀』の応神天皇 25 年（西暦 294 年、史料解釈上は 414 年）と「木苧満致」の名が見える『三国史記』百済本紀の蓋鹵王 21 年（西暦 475 年）とでは時代が異なる。
- (b) 百済の名門氏族である木満致が、自らの姓を捨て蘇我氏を名乗ったことの不自然さ、渡来系豪族が自らの出自を改変するのは 8 世紀以降であること
- (c) 木苧満致が「南行」したとの『三国史記』の記述がそのまま倭国へ渡来したことを意味しないこと
- (d) 百済の名門氏族出身でありながら、孫の名前が高句麗を意味する高麗であること

#### 【問題点に対する筆者の反論】

- (a) については、前章で「木満致」と「木苧満致」の年代が合致することを論証した。
- (b) については、水谷千秋氏は次のように述べている。

「『謎の豪族 蘇我氏』水谷千秋 文春新書 2006 」

「倭国に来てからなぜ木氏と名乗らないのであろうか。木氏は隋書百済伝が記す「大姓八族」の序列によれば、第三番目に位置づけられている・弱小氏族ならともかく、これほどの家柄の貴族が百済から倭へ移住したとして、なぜ姓の木（苧）を捨てるのだろうか。名前の満致（満智）だけを残して、新しく「蘇我満智」を名乗ったならば、これは誠に奇異であろう。二百年近くのちのことではあるが、百済が滅亡した直後に倭国へ亡命してきたこの国の貴族たちは、沙宅氏や木素氏など、いずれも本国での姓をそのまま名乗っている。王族の余氏は百済王氏という新たな姓を与えられたが、これは一見して知られるように本国で王位にあったことを示す名誉な名前であった。これらと比較しても、百済の名門貴族が倭国へ来て、「蘇我満智」を名乗ることの不自然さが際立つだろう。」

★これについて、次のように反論する。

蘇我氏を名乗ったのは、木満致ではなく、その子孫であると考えられる。神功紀には「葛城襲津彦」が、「平群木菟宿禰」と「物部伊苜弗大連」が「蘇賀満智宿禰」と並んで記されている。

この時代に「葛城氏」「平群氏」「物部氏」などの姓（氏名）は成立していなかったことは、専門家たちが定説としていることではないか。「蘇賀満智宿禰」の「蘇賀」は潤色であることは明白である。それにもかかわらず、「姓の木（苜）を捨てるのだろうか」として「木満致がこのときに既に蘇賀を名乗っていた」ことを不自然として批判する。批判のための批判である。既に論証したように、蘇我満智宿禰＝蘇我麻智宿禰＝木満致は雄略朝の人物である。このときもまだ「蘇我氏」を名乗っていなかったのであろう。また、白村江の敗北後に亡命してきた百済氏族と同列にして比較することはいかながなものであろうか。白村江後の亡命百済人は百済人として誇を持っていたので、百済姓をそのまま用いたが、6世紀の渡来人は倭国に溶け込むために倭国風の姓を名乗ったのであろう。蘇我氏の配下にあった百済系の渡来人である王辰爾一族も、功績が認められて「船史」という姓を与えられている。その他の渡来人も「倭漢氏」「西文氏」などの倭国風の姓になっている。木満致の後裔の稲目の時代に倭国の大臣に就任するためには、百済の姓の木氏から倭国の姓に変える必要があったと考えることができる。

\*ひよとしたら、稲目の父について日本書紀が何も記していないのは、蘇我氏の祖（木満致の子孫が）蘇我を名乗ったことを隠すためだったかもしれない。

(c)については、木苜満致が倭国に来たことを意味しないことは、その通りであるが、木苜満致が倭国に来た可能性は極めて高いと考えられる。日本書紀の応神 25 年の記述には

「木満致が国政をとった。王の母と通じて無礼が多かった。天皇はその暴を聞いて（倭国に）およびになった。一百済記によると、木満致は木羅斤資が新羅を討ったとき、その国の女を娶って産んだところである。その父の功を以って、任那を専にした。わが国に来て日本と往来した。職制を賜わり、わが国の政を採った。権勢盛んであったが、天皇はそのよからぬことを聞いて呼ばれたのである。」と記している。

★「王の母と通じて無礼が多かった」や「権勢盛んであったが、天皇はそのよからぬことを聞いて呼ばれたのである」とのことは、真実性が弱いですが、この記事の全てが創作とは考えられない。日本書紀は、この応神紀の木満致が履中紀の蘇賀満智宿禰と思われるように記している。筆者は、「木満致が倭国に来た」という伝承が存在したからこそ、この記事を書いたと筆者は考える。年代を古くするとともに、内容を潤色したのであろう。そうでなければ、この記事は全て創作されたことになる。「木満致」は存在しなかったことになり、それは考えられない。

ただ、木満致が「百済の悪臣」であって、木満致は、木羅斤資が「新羅の女を娶って産まれた」とする。これについては創作の可能性が高い。蘇我氏は、先祖の代から悪臣で、母親が憎むべき新羅の女として、木満致を貶めるための創作であると、筆者は考える。蘇我氏の先祖が百済人ではなく倭国の豪族であったなら、木満致を創作する必要がない。平群真鳥が悪臣であると記しているように、石川宿禰を悪臣として記せばよいはずで、わざわざ百済の木満致を記す必要がない。何らの根拠なしに、蘇我氏の先祖が木満致が蘇賀満智宿禰であるように記すはずがないのである。



## (2) 倉本一宏氏の渡来人説批判は根拠なし

倉本一宏氏は、渡来人説が成り立たないことを述べているが、それこそ根拠が弱く成り立たないことを述べていく。「倉本一宏 『蘇我氏—古代豪族の興亡』 中公新書 2015」

①「蘇賀石河宿禰が河内国石川別業に生まれたとあることから、本拠地も河内国石川郡であったと考えるものである。しかしこれは、蘇我本宗家が滅んで、蘇我倉氏が蘇我の氏上を継承し、これが石川氏へと改姓した後に、主張された伝承であろう。」

★「蘇我倉氏が石川氏へと改姓した後に主張された伝承」とすることは、根拠が弱い推測の仮説にすぎない。河内石川が蘇我氏の発祥の地であることには確かな根拠がある。これについては第5章で述べる。

②「蘇賀満智という人物自体、石川氏によって創出された人物である可能性が高い。」

★既に述べたように、三国史記に記す百済官僚の木笏満致が実在したことは間違いない。その「木笏満致」が、日本書紀応神25年に引用する百済紀の「木満致」にあたることは、年代矛盾が解消できたことから、まず間違いないであろう。ということは、履中紀の蘇賀満智宿禰が創作とすれば、石川氏が実在した「木満致（木笏満致）」を元にして、蘇賀満智宿禰を創作したことになる。蘇我氏の先祖が百済系渡来人でなく倭人であったなら、自分の先祖を百済人であったように創作する必要がない。蘇我氏の先祖の満智宿禰が百済の官僚の「木満致（木笏満致）」であることの伝承があったからこそ、日本書紀に記されと考えるほうが説明がつく。

★倉本氏が「蘇我満智が、石川氏によって創出されたとする」とする根拠は、日本書紀成立のときに、石川氏が蘇我氏の代表であったことだけある。これは根拠としては極めて弱い。

### 《蘇我氏の系譜について》

★蘇我氏の系譜は日本書紀からは、わからない。『公卿補任』の蘇我氏系譜では、「満智宿禰—韓子宿禰—高麗宿禰—稻目宿禰」とあり、『紀氏家牒』では、「蘇賀石河宿禰—満智宿禰—韓子宿禰—馬背宿禰（亦に曰ふ高麗）—稻目宿禰」と記す。石河宿禰は「公卿補任」には記されていないので、後で付け足された可能性があるが、「満智宿禰」はかなり古くからの系譜に記載されていたと考えられる。特に、日本書紀には全く記されていない稲目の父の高麗について「馬背宿禰（亦に曰ふ高麗）」と記している。つまり「紀氏家牒」の系譜はそれなりの伝承に基いて記されたものであることになる。これらの系譜はそれなりの信頼性があり、蘇我満智（木満致）が創作ではない可能性は極めて高いことになる。（ただし、筆者は韓子と高麗についてはその名前に疑問がある。満智宿禰と稲目の間の2代については、何か隠さなければならないことがあったと考えられる。

★武内宿禰を元とする系譜はいつごろに成立したのであろうか。おそらく馬子の時代であろう。推古28年に「この年、皇太子（聖徳太子）と嶋大臣（蘇我馬子）は合議して、天皇記と国記、臣連伴造国造百八十部と公民等の本記を録した。」と記している。このときに、蘇我氏の系譜が出来ていたことは間違いないであろう。ただし、その後に変更された可能性は大きい。日本書紀には蘇我氏の系譜が不明なのは、何か不都合なことがあったのでそれを隠したと考えられる。稲目の父については一切記さないことや、韓子という疑わしい名前も蘇我氏の系譜を隠すため

だったと考えられる。その一方で、石河宿禰、木満致、蘇賀満智宿禰が記されている。つまり、隠すべきことは、稲目の父（高麗）のことであり、蘇賀満智宿禰については、馬子の時代から蘇我氏の系譜に存在していて、決して後の時代に創作されたのではないと考えられるのである。

### ③「古語拾遺・雄略天皇紀」の記事について

「蘇我麻智宿禰をして三蔵（斎蔵・内鞍・大蔵）を檢校しめ、秦氏をしてその物を出納させ、東西の文氏をして、その簿を勘録せしむ。是を以って、漢氏に姓を賜いて、内蔵・大蔵と為す。」

★これについて倉本氏は次のように述べる。

「古語拾遺」の記事は、秦氏や蘇我倉氏の家伝に基いて造作されたものである可能性が高い。「蔵」関係の伝承を語るところから、6.7世紀における蘇我氏の朝廷のクラ管掌という史実を遡らせて、蘇我氏のなかでもクラを管掌した蘇我倉氏とその後裔である石川氏によって作られた伝承で考えるべきであろう。」

★蘇我倉氏が成立する前から、蘇我氏本宗家による倉の管理は行われていたことは次の日本書紀の記述から明らかである。この記事は、決して蘇我倉氏や後の石川氏によって作られたのではない。

《欽明即位前期宣化3年》 「天皇は大津父を召されて、近くにはべらせて、手厚く遇された。大津父は、大いに富を重ねることになったので、皇位をおつぎになってからは、大蔵の司に任じられた。」

《欽明元年8月》 「秦人、漢人ら近くの国から帰化してくる人々を集めて各地の国郡に配置して、戸籍に入れた。秦人の戸数は全部で7053戸で、大蔵掾（大津父のことか？）を秦伴造とされた。」

★大津父は秦氏の人物である。つまり、既に欽明朝に秦氏が倉（蔵）を管理していたのである。この古語拾遺の記事は雄略朝のときかどうかは疑問があるが、遅くとも欽明朝以前に秦氏が倉の管理・出納を担当していて、蘇我氏がそれを管轄していたのは事実であろう。後の馬子の時代にできえ成立していなかった蘇我倉氏によって作られたはずがない。

この「古語拾遺」の雄略紀は、全て秦氏に関する記事であり、つまり秦氏の伝承を元に記載されたことになる。雄略朝は、秦氏が復権したときであり、東漢氏が活躍した時代でもある。そのような雄略大王時代のこととして、秦氏、東西の文氏、蘇我麻智宿禰が記されていることは、「蘇我麻智宿禰」が決して創作ではない可能性が高い。蘇我麻智宿禰が秦氏の上役であったことが、秦氏の伝承に存在していたと考えられる。その雄略大王時代は、木苧満致が南へ下った時代である。「古語拾遺」の蘇我麻智宿禰が三国史記の「木苧満致」と同じ時代であることは偶然ではなく、蘇我麻智宿禰＝木苧満致であったからであろう。

★以上述べてきたように、蘇我氏渡来人説を否定する根拠はほとんどないのである。倉本氏の渡来人説を否定する言及においては、渡来人説につながる所伝を、「不自然」や「後に創作された」として、「蘇我渡来人説の根拠は存在せず・・・」とする。何が何でも渡来人説を否定したいという気持ちが元にあると感じてしまった。

### 3. 「大和曾我発祥説」と「葛城氏末裔説」について

★蘇我氏の出自としては、渡来人説を除いて3つがあるとのことである。大和高市郡曾我とする説、大和葛城郡とする説、河内石川郡とする説である。筆者は渡来人説だが、蘇我氏の発祥の地は、河内石川であり、その何代か後の稲目の時代に飛鳥に移動したとするものである。これについては第5章で詳しく述べることにする。この章では、大倭国高市郡曾我とする説と大倭国葛城郡とする説は両方とも成り立たないことを論証することにする。

#### (1) 葛城氏末裔説について

★蘇我氏は葛城氏の一庶氏族とする説である。蘇我氏の系譜の高麗以前は架空の人物であり、後の造作であるとして、稲目はかつての大臣葛城氏につらなる人物であり、それゆえに大臣にも就任することが出来たとみる説である。その根拠として、一つは馬子が推古天皇に葛城県を自分の本拠であるとして要求したこと、二つは皇極天皇元年、蝦夷が蘇我大臣蝦夷は自分の祖先を祀る廟を葛城の高宮に立てて、八佾之舞（ヤツラノマイ）を奉納したことである。これは、志田諄一氏が唱えられた説であり、加藤謙吉氏が同様の説である。

★根拠とする二つの記事が蘇我氏の葛城氏の一支部であることの根拠となるかどうか、検証する。まず推古32年の記事である。

「大臣（蘇我馬子）は・・・二人の臣を派遣して、天皇に申し上げて言いました。『葛城県は元々はわたしめの本拠です。その県により姓名を為しました。願わくば、永遠にその県を与えていただいて、わたしめが治める県としようと思っています。』」

★高市郡曾我説の水谷千秋氏はこの記事について、次のように述べる。

「葛城県は自分の本拠であり、これにより自分の姓名を名乗っている。・・・というのである。馬子の姓名が「その県に因りて」命名されている、というのは一見理解しがたい所伝である。ただし、『聖徳太子伝略』の「蘇我葛木臣」という人名が見える。これが馬子の別名とみられるので、・・・そうであれば、馬子が「蘇我葛木臣」というもう一つの名をもっていたことを書紀編者は注記すべきであろうが、それが無いのはやはり説明が不十分と言わざるを得ない。」

（注：黛弘道氏によれば、『聖徳太子伝略』の「蘇我葛木臣」の記述は「蘇我からでた葛城臣」という意味で、馬子のことではない。蘇我氏が葛城氏から出たことではない。

「黛弘道 『物部・蘇我氏と古代王権』 吉川弘文館 2009年」

★推古大王が「今、朕の世に、この県を失ってしまえば、後の君主が『愚かな、白痴の婦人は、天下に君臨して、突然にその県を滅ぼした』と言うだろう。」として馬子の要求を断っている。

この推古大王の発言からは、葛城県は蘇我の本拠ではないと、推古が判断したからと考えられる。

推古32年頃には、既に「国記」「天皇紀」の編纂がある程度進んでいたときで、武内宿禰を始祖とする蘇我氏などの系譜も出来上がっていた。それを元に馬子が葛城県を要求したと考えられる。仮に葛城県が元々蘇我氏の土地であったなら、もっと以前に要求していたはずである。

★渡来人説の考古学者である坂靖氏は、蘇我氏の大和での本拠地は、考古学的に飛鳥であるとする。

「蘇我氏は最初から飛鳥に根を下ろした。・・・(蘇我氏葛城支族説は) 葛城から飛鳥への移動を前提にしたもので受け入れがたい。」と述べている。「蘇我氏の古代学 新泉社 2018」

★葛城氏は5世紀中ごろには、ほぼ滅んでいる。蘇我氏が葛城氏の後裔であったことの証拠になる考古資料は一切なく、その末裔が6世紀に力をつけたとすることは、単なる推測に過ぎない・

★二つめの根拠とする記事は皇極天皇元年、「蝦夷が蘇我大臣蝦夷は自分の祖先を祀る廟を葛城の高宮に立てて、八佾之舞を奉納した」ことである。

\*平林彰仁氏は次のように述べている。「平林彰仁『蘇我氏の実像と葛城氏』白水社 1995年」  
「この蘇我蝦夷が葛城高宮の祖廟に祀った祖霊とは、具体的に蘇我氏の先祖の中のどのような人物なのだろうか。蘇我蝦夷がわざわざ葛城高宮の地を選定して祖廟を造立した意図から、特に葛城の地に縁が深く、蘇我氏の祖として祀られるにふさわしい著名な人物であったに違いない。とすれば、それは葛城氏をはじめ蘇我氏や平群臣・波多臣など諸姓諸氏の祖と伝えられる武内宿禰以外には考え難い。・・・伝説上の人物である武内宿禰の本拠について、「紀氏家牒」(逸文)は・・・大倭国葛城県五処里(現奈良県御所市御所)にあったと伝えている。また日本書紀・允恭紀5年7月己丑条に、葛城襲津彦の孫の玉田宿禰が・・・尾張連吾襲を殺害して武内宿禰の墓域に逃げ隠れたとある。孝元記の系譜は・・・葛城襲津彦を武内宿禰の子と伝えるが、上の所伝から、襲津彦の孫の玉田宿禰の本拠付近に武内宿禰の墓があると伝えられていたことがわかる。」

\*つまり、蝦夷がいう自分の祖先とは武内宿禰のことであり、葛城氏のことではないのである。推古32年の記事と同様に、武内宿禰の系譜が成立したことにより、蝦夷が祖霊である武内宿禰の廟を建てたのであろう。

\*水谷千秋氏は、

「「祖廟」は日本ではきわめて稀にしか存在せず、『八佾の舞』も日本では他に例がない。蘇我氏の専横を強調するために、書紀編纂段階で造作された可能性がたかいであろう。祖廟を立てたという記事の信頼性も筆者は疑わしいと考える。」

「・・・葛城氏が衰退する以前に蘇我氏の人名が記されていることからすれば、蘇我氏と葛城氏は元来別個に存在した氏ということになるだろう。葛城氏と同族関係にあったとしても、あくまでも擬制的なものであったことになる。」と述べていて、この記事に疑っている。

「『謎の豪族 蘇我氏』水谷千秋 文春新書2006」

★以上のように、二つの史料は、「葛城氏末裔説」の根拠にならないことが明らかである。よって現在、この説をとる専門家は少なくなっている。

## (2) 高市郡曾我発祥説について

★現在の主流はこの説である。その代表として倉本一弘氏の説を紹介して、その説が成り立たないこ

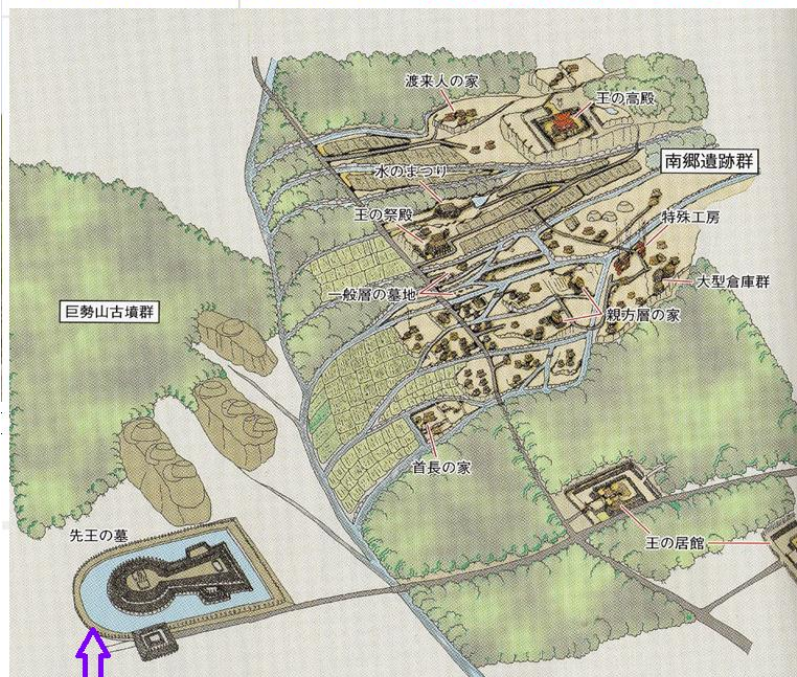
とを述べる。倉本氏の説は、葛城支族説と高市郡曾我説を合わせたようなものである。倉本説の要点を箇条書きに示す。「 倉本一宏 『蘇我氏—古代豪族の興亡』中公新書 2015 」

- \* 「何らかの葛城集団の後裔が存在して、葛城氏の氏族伝承や王系譜を作り上げ、それを日本書紀に定着させることに成功したとしか考えられない。その集団こそが蘇我氏である。」
- \* 「記紀にみえる『葛城氏』とは、すなわち蘇我氏が作り上げた祖先伝承だったのである。」
- \* 「葛城地方を地盤とした複数の集団のなかから、有力な集団が編成され、蘇我氏として独立したと考えればいいだけのことである。」
- \* 「蘇我氏は葛城地方の中東部にあたる曾我の地に進出した。・・・進出したというよりは、元來曾我川流域の曾我地域周辺を地盤としていた集団かもしれない。」
- \* 「蘇我氏は氏として成立し、葛城集団の勢力の大多数を傘下に収めた。そして、葛城集団が持っていた政治力と経済力、対朝鮮外交を掌握や渡来人との関係、また大王家との姻戚関係という伝統をも、掌中にしたものと思われる。」

★読者の皆さんは、この倉本氏の発言をどのように感じられるだろうか。一見、なるほどと思われるかもしれない。しかし、筆者には全く受け入れがたいことである。

★これらの倉本氏の発言は、根拠を示した実証的なものではなく、思い込みによる単なる作文のように感じられる。「葛城地方を地盤とした複数の集団のなかから、有力な集団が編成された。・・・葛城集団の勢力の大多数を傘下に収めた」とするなら、それは蘇我(稲目)より許勢(男人)がふさわしい。許勢氏(巨勢)の地は葛城の隣地であり、許勢(男人)は稲目の前の継体大王時代に大臣に就いているからである。許勢氏はともかく蘇我氏を葛城氏に結びつけることには、文献史料や考古資料は全く存在しないのである。

### 御所市・南郷遺跡群 (5世紀初頭とされる)



「葛城襲津彦の墓」の説がある室宮山古墳

≪「葛城の王都・南郷遺跡群」坂靖・青柳泰介 新泉社≫より

★倉本氏は、蘇我氏・非渡来人説を説明するために必死になっておられるようであるが、無理がある。

「蘇我稲目が、宣化大王のときに突然に大臣となり、欽明大王時代に大きな業績を残したこと」を説明するために、あれこれ、ほとんど根拠なしでもって論じておられるように感じられる。

\*坂靖氏はこの説についても、次のように述べて高市郡曾我説を批判している。

「この説は地名を重視した説で、・・・元々の出身地は曾我で、蘇我稲目の代になってから飛鳥に移動したとみなさなければならぬ。・・・近鉄大阪線真菅駅のあたりの橿原市曾我町である。ここに、曾我坐宗我都比古神社がある。『延喜式』にある社名であり、社地が移動していなければ平安時代にまで遡る可能性がある。祭神はソガヒコとソガツヒメである。蘇我氏の一族、境部摩理勢が曾我に田家（豪族の私有地）を構えていたという記載がある。この曾我と関連するなら、七世紀になって蘇我氏が勢力を伸長してからここに進出したのかもしれない。五世紀の遺跡としては、曾我遺跡がある。・・・大規模な玉生産遺跡である。・・・ヤマト王権直営の専門的な玉作り工房と評価できる。・・・葛城氏や物部氏などそれぞれの有力地域集団も、それぞれ自らが関わっていた地域の中で、独自の生産活動を行っていた。・・・地名を最重要視した場合、この説が成立する余地は残るが、やはり最初から蘇我氏は飛鳥に根を下ろし、そこで力をつけたとみたほうがわかりやすい。・・・ともかく、**曾我は葛城から遠い。**」



曾我坐宗我都比古神社

★つまり、曾我の地は蘇我氏の居住地ではなく、ヤマト王権の玉作の拠点だったので、蘇我氏の発祥の地とは考え難いということである。蘇我という姓は曾我の地からとったことには、筆者も同意するが、それが蘇我氏の本拠地または居住地ではないのである。大臣にふさわしい姓として飛鳥の隣に存在する曾我の地から取り入れたと推測する。ソの字として曾ではなく蘇という尊い字

を用いていることも何かを暗示しているようである。

★とにかく、冒頭でも述べたように、蘇我氏の最大の謎は、(ア) 稻目が継体没後の宣化大王のとき、突然に大臣についたこと。(イ) 欽明時代に数々の業績を残したこと。(ウ) 蘇我氏と百済との密接な関係があったことである。この3点の理由を、合理的で確かな根拠でもって、説明する必要がある。しかし、葛城説でも曾我説でも確かな根拠は存在しないので、無理に説明しようとすると、創作文になってくる。渡来人説のみが、3点を合理的に説明できるのである。それは第5章で述べる。

### (3) 坂靖氏の蘇我氏渡来人説

★上で、高市郡曾我説を批判するのに坂靖氏の言及を紹介した。そこで坂説がどのような説であるかを紹介しておく。「坂靖『蘇我氏の古代学』 新泉社 2018」

「五世紀の飛鳥に全羅南道からの渡来人が多数いたことは、百済系の陶質土器、瓦質土器や韓式系軟質土器が集中して分布していることからわかる。・・葛城氏の寺口忍海古墳群、御所市の石光山古墳群、桜井市の押坂古墳群など。・平底瓶や壺などが副葬されることがあって、これらは百済中心部と関連するものかもしれない。・・・それに対して、全羅南道と関連する軟質の瓶や長胴甕は、奈良盆地の多数の遺跡から出土している。」

「全羅南道に集中する前方後円墳：ほぼ六世紀初頭の築造であり、継体・武寧王の時代である。倭の要素は濃厚だが、百済王権から一定の影響も認められる。被葬者については・・・私は在地首長説である。まさに、継体大王と武寧王の両方との交渉をもった在地勢力と位置づけられる。その様相が一変するのが、咸平の新徳二号墳である。陵山里型横穴石室であり、百済王権中央の直接的な影響が明らかである。

いずれにしても、百済王権の支配下の人物といえる。全羅南道地域の支配権は百済王権の手にわたったのである。」

#### 蘇我氏の出自は全羅南道地域の馬韓残余勢力

「このように五世紀中頃～六世紀はじめ頃の朝鮮半島全羅南道残余勢力は、ヤマト王権と百済王権の中間で翻弄されつつも、その両方と深い関わりを有していた。・・・

こうした全羅南道地域を故地とする渡来人の中に、蘇我氏の祖が存在したのではないだろうか。

この段階で、仮説を提示してみよう。

ヤマト王権と百済王権の中間にあり、両方の文化に精通しつつも、在地では実力を発揮できなかった蘇我氏の祖が、五世紀代にヤマト王権の招きに応じて、飛鳥

に居住した。奈良盆地には、これまでみたように、様々な階層の、さまざまな故地をもつ渡来人がいた。そのなかで飛鳥の渡来人のリーダーとして徐々に頭角をあらわしてきたのが蘇我氏の祖である。継体大王の時代までは古墳を造る力はまだなかったが、政権運営のなかで百済の思想や技術の受け入れが最重要の課題となったとき、蘇我氏稲目がその能力を遺憾なく発揮したのである。

ヤマト王権と百済王権の中間で、多くの渡来人をたばねたリーダーを輩出した場所としては、この全羅南道地域の故地といえるだろう。」

★考古学にもとづいての説であり、倉本一宏氏の説よりは、はるかに実証的である。根拠は、(ア) 全羅南道地域の土器や甕が飛鳥などから多量に出土していること (イ) 全羅南道地域は、前方後円墳の築造を最後に百済王権の支配になったこと、である。筆者はこの本から多くのことを学ぶことが出来た。ただ、筆者は、この説を否定はしないが、ちょっと違うように思う。その理由としては、(i) 全羅南道地域残余勢力のリーダーが渡来して直ぐにヤマト王権の大臣に就くことは考え難い。(ii) 全羅南道地域残余勢力のリーダーだけでは、既に渡来していた東漢氏や王辰爾などの渡来人を配下にするできない、ことである。

今後、この説についてはさらに検証することにする。

## 4. 蘇我稲目の登場とその事績

★既に述べてきたように、蘇我氏のなかで実在が確実とされるのは宣化紀に突然に登場する蘇我稲目である。蘇我氏の出自を論じるには、蘇我稲目とその子の馬子の事績をしっかりと理解しておく必要がある。欽明紀～推古紀にかけて、稲目と馬子の数々の事績が記されている。これらを順に示して解説する。

### (1) 蘇我氏稲目の事績



蘇我稲目 (Web画像より)



## 《宣化元年春1月》

都を檜隈の廬入野に移した。それで宮号とした。・・大伴金村大連を大連とし、物部麁鹿火大連を大連とすることは、以前と同じである。また蘇我稻目宿禰を大臣とした。安倍大麻呂臣を大夫とした。

\*継体から安閑・宣化を経て欽明への大王位の継承については、次回の古代史ネットで述べることにするが、稻目が大連に就任したのは宣化大王の即位のときではなく、欽明即位のときであると考えている。いずれにしても重要なことは、それまでほとんど記されなかった蘇我氏の人物が突然に大臣として登場したことである。

## 《同年5月1日》

蘇我大臣稻目宿禰は尾張連を派遣して、尾張国の屯倉の穀を運ばせようとした。

\*蘇我氏が屯倉の創設を積極的に行ったことの反映であるとすることはできる。安閑・宣化の母の氏族である尾張連を稻目の配下になっていることは、辛亥の変(531年)に関係あるように感じられる。

## 《欽明即位前紀：宣化4年》

天国排開広庭皇子は天皇に即位した。年齢は若干。皇后を尊び、皇太后とした。大伴金村大連・物部尾輿大連を大連とし、蘇我稻目宿禰を大臣とした。これらは以前と同じである。

\*筆者は、辛亥の変(531年)に継体大王が亡くなって、勾大兄皇子(安閑大王)と檜隈高田皇子(宣化大王)が殺されて欽明大王が即位したとの説をとる。(詳しくは次号以降で述べる。)稲目が辛亥の変に関わり欽明が即位したことを隠すために、宣化大王のときに稲目は既に大臣であったと記したと考える。

## 《欽明13年10月》

(百済の聖明王が、釈迦仏の金銅像などを倭国にもたらしたことに對して)

蘇我大臣稻目宿禰は言った。「西蕃の諸国は皆、もっぱら仏を敬っています。

豊秋日本だけが、どうして独りで背くことができますでしょうか」物部大連尾輿・中臣連鎌子は同じく言った。「我が国家、天下に王としているのは、常に天地社稷の百八十神であり、春夏秋冬に祭り拝むことを事業としています。今、これを改めて、蕃神)を拝めが、恐ろしいことに、国神の怒りがあるでしょう。」

\*蘇我氏と物部氏による「崇仏・廢仏」に争いの始まりであるが、なぜ稲目は仏教の隆興に積極的であったのだろうか。百済では4世紀末に仏教が伝わっていた。枕流王の時代の384年に東晋から高僧の摩羅難陀が渡来している。392年には阿莘王が仏教を信仰せよとの命を出している。6世紀の武寧王の時代に百済では本格的に普及する。おそらく稲目が、百済の仏教をはじめとする百済文化に精通したからであろう。蘇我氏が古くからの倭人の豪族であったなら、物部氏や中臣氏ほどではないにしても、仏教を積極的には導入することはなかったはずである。

《欽明 14 年 7 月》

蘇我稲目は勅を承って王辰爾を派遣して船の賦税を数えさせて記録させた。そして、王辰爾を船司と為し、船史という姓を与えた。今の船連の先祖である。

\*王辰爾は、16代百済王・辰斯王の子である辰孫王の後裔とされるが、それを平安時代につくられた系譜である。王辰爾は「船の管理をする専門家」の南朝系百済人であったと考えられる。文字や税の徴収にも精通していたその人物を、稲目は自分の配下のように使っている。稲目と王辰爾とはどちらも百済との関係がある人物だった推測できる。王辰爾にとって稲目は従うべき存在だったのであろう。

《欽明 16 年 2 月》

(百済王子の余昌(聖明王の子・後の威徳王)が王子の恵(余昌の弟)を派遣して百済の聖明王が戦死したことを伝えた後)・・・しばらくして蘇我臣は恵に問い訊ねた。

「聖王は天道地理を理解し、その名は四表八方に知られています。・・・突然に眇然ことで、昇遐しまい・・・玄室で安らかに眠ることになろうとは。どれほどの痛みの酷さか！どれほどの悲しみの痛切であることか！すべての心があるものは誰もが傷つき、死を悼むだろう！なんの咎があって、このような禍となったのか。また、なんの術を用いて国家を鎮めるのか。」

恵は答えた。「わたしめは、人間性は愚かで素晴らしい計画を知りません。いかがしたものでしょうか。禍福よる国家の存亡については」蘇我卿は言った。

「昔のことですが、大泊瀬(雄略天皇)の世のときに、あなたの国が高麗に攻められて、重なった卵のように非常に危険な状態になりました。天皇は神祇伯に命令して、神を敬って策を神祇から受けました。祝者はすぐに神の言葉を宣託して報告しました。・・・それで社稷は安寧となりました。・・・あなたの国では、この神を捨てて祀っていないと。今、これまでの過失を改めて、悔い、神の宮を修理して、神の霊を祭り奉れば、国は栄えるでしょう。あなたは、これを忘れてはいけません」

\*以上のように稲目と百済王子・恵との問答が詳しく記されている。

もちろんこの内容は、全て真実とは思われぬ。しかし稲目と百済王子とが問答したことは確かであったろう。稲目は臣下であるにも関わらず、百済王子を対等以上の目線で説教している。百済の危機を憂慮していたことがわかる。

ここでも稲目と百済との深い関係が推察できる。

《欽明 16 年 7 月 4 日》 蘇我大臣稲目宿禰・穗積磐弓臣たちを派遣して吉備の五つの郡に白猪屯倉を設置した。

《欽明 17 年・7 月 6 日》蘇我大臣稲目宿禰たちを備前の児嶋郡に派遣して屯倉を設置した。葛城山田直端子を田令にした。

\*「葛城山田直端子」は葛城国造の出身で葛城臣とは別の氏である。

つまり蘇我氏は葛城国造も配下にしていただことになる。

《同年 10 月》

蘇我大臣稻目宿禰たちを倭国の高市郡に派遣して、韓人大身狹屯倉と高麗人小身狹屯倉を設置した。紀国に海部屯倉を設置した。一ある本によると、あちこちの韓人を大身狹屯倉の田部としました。高麗人を小身狹屯倉の田部とした。韓人・高麗人を田部にした。それで屯倉の号としたという。

\*身狹は橿原市見瀬のことである。ここは蘇我氏の勢力圏である。

日本書紀の分注に「言韓人百濟者」とあり、韓人とは百濟人のことである。ここでも稲目は百濟人や高句麗人を配下にして、部民にしたということである。百濟と関係深い稲目しか成し得なかったことである。

《欽明 23 年 7 月》

大將軍の紀男麻呂宿禰を派遣して、兵を率いて哆唎を出発した。副將の河辺臣瓊缶は居曾山を出発した。・・河辺臣瓊缶は独りで進み出でて、戦った。向かった土地を皆、抜き取った。新羅は白旗を上げて、兵を投げ捨てて、投降した。

\*黛弘道氏によれば、河辺臣は蘇我氏の一族で稲目以前に分かれた枝氏とのことである。その河辺氏の人物が稲目と同じ時代に、韓半島で活動していることは、河辺の祖（蘇我氏の祖）が韓半島と関係があることを示唆する。

《欽明 23 年・8 月》

天皇は大將軍の相伴連狹手彦を派遣して、兵数 1 万を率いて高麗を征伐させた。狹手彦は百濟の計画を用いて高麗を打ち破った。七織帳を天皇に奉り献上した。・・美女の媛媛と従女の吾田子を蘇我稲目宿禰大臣に送った。それで大臣は二人の娘を召し入れて、妻として軽の曲殿に居らせました。

\*稲目が相伴連狹手彦から美女を贈られたことは、相伴連狹手彦の韓半島での活動に稲目が関係していたことになる。稲目とこの二人の美女との間の子については、一切記されていないが、稲目には、蘇我石寸名、蘇我小祚、田中刀名など生母不明の子女：4 男 3 女の名があったとされる。稲目と二人の美女との間の子は、これら 7 名のうちの誰かであったかもしれない。

《欽明 30 年 1 月 1 日》

天皇は詔して言った。「田部（部民）を量って置いたが、その土地に田部ではない民がやって来るようになってから長い時間が経った。10 歳になったのに籍から漏れて、課から逃れている者が多い。胆津を派遣して…（胆津は王辰爾の甥です。）白猪田部の丁の籍を検定するべきだ」

《同年 4 月》

胆津は白猪田部の丁者を検しに見て、詔のままに籍を定めた。結果、田戸（戸籍）を成した。天皇は胆津（王辰爾の甥）が籍を定めた功績を喜んで、姓を与えて白猪史とした。すぐに田令に参って、端子（葛城山田直端子）を副とした。

\*戸籍が作られ、農地と農民一人一人を正確に把握した農業経営が行われる

ようになったということである。このような事業は在地の倭人では出来ないことで、元百済系渡来人の胆津だからこそ出来たことである。胆津は稲目の配下であった王辰爾の甥である。稲目の関与があったことは間違いないであろう。胆津は文字による農民の管理能力手腕を発揮し、農民たちの戸籍を作成したのである。



蘇我稲目の墓との説がある「真弓罐子塚古墳」  
明日香村真弓・築造時期は6世紀後半

## (2) 許勢男人について

★以上のように、稲目の功績は大きく、また百済との関係が深かったことがわかる。とりわけ、稲目と百済系渡来人の王辰爾との関係や、百済王子・恵との問答は、稲目が百済の高官または王族と血縁がある可能性が大きいと推測できる。渡来系集団と大臣氏族との関係は、蘇我氏より以前の葛城氏、平群氏、巨勢氏もあったことが伺われるが、蘇我氏はそれが際立っている。特に百済との関係が極めて強いことがわかる。そこで、蘇我稲目の前の継体時代に大臣となった許(巨)勢氏と比較してみることにする。

《継体元年春1月4日》

物部麁鹿火大連・許勢男人大臣たちは言った。「(天皇の)枝孫の中から、吟味して選べば、賢者はただ男大迹王だけだ」

《継体元年2月4日》

大伴金村大連を大連として許勢男人を大臣として、物部麁鹿火大連を大連としたことは、以前と同じである。

—継体20年、都を遷して大和の磐余の玉穂に都を置いた—

《継体 21 年（磐井の乱）》

・・・天皇は大伴大連金村・物部大連鹿火・許勢大臣男人たちに詔して言った。「筑紫の磐井が反いて、襲って来て、西の戎の土地を有している。今、誰が将軍となるべきだろうか？」

《継体 23 年 9 月》 許勢男人大臣が亡くなった。

《安閑元年 3 月》

有司は天皇のために億計天皇（仁賢天皇）の娘の春日山田皇女に納采して皇后とした。  
・・・別に三人の妃を立てた。許勢男人大臣の娘の紗手媛、紗手媛の妹の香々有媛、物部木蓮子大連の娘の宅媛を立てた。

《欽明元年 9 月 5 日》

天皇は難波祝津宮に行った。大伴大連金村・許勢臣稻持・物部大連尾輿たちが従い、お供をした。

《欽明 16 年 2 月》

（百済の聖明王が戦死して、百済王子の余昌（聖明王の子・後の威徳王）が王子の恵を派遣したとき）・・・許勢臣は王子の恵に問うた。「ここに留まるのか、それとも本国に帰るのか？」

《欽明 31 年 5 月》（天皇は）許勢臣猿と吉士赤鳩を派遣して難波津から出発して、船を狭々波山に控き引し飾船に装って、近江の北の山に向かわせた。

★許勢男人は継体大王即位のときに大臣に就任して継体 23 年に亡くなっている。継体時代に許勢男人は多く記されている。また、娘の紗手媛と香々有媛が安閑の妃になっていて、欽明元年に許勢男人子供と思われる許勢臣稻持が記されている。その後も許勢氏の人物は記されているので氏族としては存続している。ではなぜ許勢氏は失脚したのか、なぜ許勢男人に代わって蘇我稲目が大臣になったのか、その理由はまた改めて述べることにするが、蘇我稲目との決定的な違いは、**事績が全くない**ことである。継体大王時代は、欽明大王時代に比べて残っていた記録が少なかったことも考えられるが、許勢男人の事績が少なかったことは間違いないであろう。

★許勢氏と蘇我氏はどちらも武内宿禰を始祖とする氏族であるにも関わらず、この違いはどういうことなのであろうか。なぜ稲目は許勢氏と違い、多くの事績をすることができて、入鹿まで四代にわたり権勢を持つことができたのであろうか。蘇我氏は先進文化の導入に積極的であったからでは説明にならない。継体時代には任那四県の割譲と引き換えに五経博士が来倭している。これはおそらく大伴金村が主導したと思われる。つまり、大王をはじめ当時の王権に携わるものは全て先進文化を導入しようとしていたのである。そのようなときに大臣に就任した許勢男人は実績が残せなかった。それに対して稲目は百済との深い関係があり大きな実績を残すことができた。その直接的な理由は、稲目が渡来人を配下にしていただけからであるが、ではなぜ渡来人を配下にできたのであろうか。筆者は、蘇我氏は百済王族や百済高官と血縁を含めて強い関係があったと考えるのである。つまり蘇我稲目は渡来人にとって従うべき貴種だったのである。

★倉本一宏は、次のように述べている。

「大臣（オオマヘツキミ）という職位は、蘇我氏のみが就いた職位と考えられる。稲目以前に大臣（オオマヘツキミ）に任じられたと伝える武内宿禰・葛城円、平群真鳥・許勢男人は、全て、史実性に乏しく、それぞれの氏族伝承の中でカバネ「臣（オミ）に美称（大）を付けられた敬称であろう。」

\*許勢男人を伝説上の人物である武内宿禰と同列にして史実ではないとするが、とんでもないことである。大伴大連金村・物部大連麴鹿火を実在とするなら・許勢大臣男人も実在して大臣であったことは間違いない。坂靖氏は、大和葛城の隣の巨勢山古墳群にある市尾墓山古墳が許勢男人の墓である可能性が高いとする。



許勢男人の墓の説が強い「市尾墓山古墳」

★ところで日本書紀には多くの倭系百濟官僚が記されているが、その中に許勢奈率奇麻という人物が記されている。

《欽明5年3月》

百濟は奈率阿毛得文・許勢奈率奇麻・物部奈率歌非たちを派遣して、表を献上して語った。

\*許勢奇麻の他には

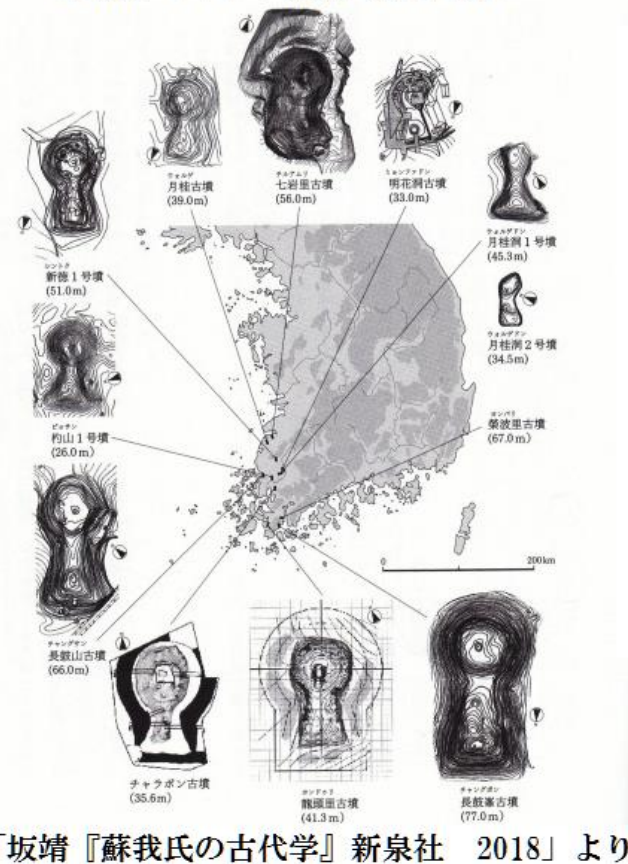
紀臣弥麻沙 物部連用歌多 斯那奴阿比多 物部奇非 物部莫哥武

科野次酒 物部哥非 科野新羅 物部鳥 火葦北国造日羅 などである。

彼らは、父親が倭国から百濟に帰化した倭人の2世であったのだろう。実際、日本書紀の欽明紀の注に「紀臣奈率というのは、紀臣が百濟の女と結婚して生んだので百濟に留まって奈率という官位を与えられているのであろう。また他の類例も同じ。」と記されているからである。物部氏は倭国の最大の氏族であった。その一族の何人かが逆渡来して百濟に帰化したのである。物部氏、紀臣、科野、火葦北国造などは百濟との地縁血縁で関係がない氏族である。百濟と地縁血縁で関係があれば百濟に帰化する必要がない。百濟との関係が薄い氏族だったから百濟へ

帰化したと推測できる。そして重要な点は、この中に許勢氏の2世がいるが蘇我氏はいないことである。つまり蘇我氏は許勢氏と異なり、百済と地縁血縁で深い関係があったと推測できる。ついでに述べると、韓国全羅南道の栄山江流域に存在する十数基の前方後円墳が存在する。これらの古墳の被葬者は倭系百済人、またはその2世と考えられる。

### 【朝鮮半島の前方後円墳】



韓国・月桂洞古墳《筆者撮影》

「坂靖『蘇我氏の古代学』新泉社 2018」より

★以上述べてきたように、許勢男人がほとんど業績を残せずに許勢氏は失脚したのは、許勢氏には渡来人との関係が弱く、倭国の発展に貢献できなかったと推測できる。一方、蘇我稲目が大きな業績を残すことができた。蘇我氏が許勢氏とは異なり、入鹿まで四代にわたり大臣として大きな権勢を持ち続けたのは、蘇我氏は百済との強い関係があったから、としか考えられない。そのことは、日本書紀に蘇我氏と百済とのその強い関係が記されていることからわかる。蘇我氏の祖が百済系渡来人であったことについての解説は、第5章で詳しく述べることにする。

## (3) 蘇我馬子と百済との関係

★欽明 31 年に蘇我稲目宿禰は亡くなり、その子の馬子は、父の稲目より増して様々な業績を残し、百済との関係は稲目時代より深まったことが記されている。百済や馬子関係の記事は極めて多いので、ここでは、法興寺（飛鳥寺）関係記事のみについて示す。

《敏達6年5月5日》

大別王（出自不明）と小黒吉士を派遣して、百済国の宰とした。

## 《敏達6年11月1日》

百済国の王は帰国する使者の大別王たちに、経論若干巻と合わせて律師・禪師・比丘尼・呪禁師・造仏工・造寺工の6人を献上した。難波の大別王の寺に安置した。

\*この記事には馬子の名は無いが、大別王たちを派遣したのことに、大臣の馬子が関係していたことは間違いないであろう。というのは、後の飛鳥寺の建立には馬子が関わっているからである。

## 《敏達13年》

蘇我馬子宿禰は（鹿深臣と佐伯達が持ち帰った）仏像2体を請願して、すぐに鞍部村主司馬達等・池辺直氷田を派遣して、修行者を尋ね求めさせた。播磨国に僧還俗の人を見つけた。名を高麗の恵便という。大臣はすぐに師として司馬達等の娘の鳴を度（出家）させた。善信尼、歳は11歳で、また善信尼の弟子の二人を度（出家）させた。・・・  
・・・（馬子は）仏殿を宅の東の方に作って、弥勒の石像を安置させた。・・・達等は仏舎利を齋食の上に得て、舎利を馬子宿禰に献上した。・・・また馬子宿禰は石川の宅の仏殿を修繕した。

\*司馬達等は中国系の渡来人で、鞍作鳥（止利仏師）の祖父にあたる。別の史料によれば、継体16年、この始祖にあたる司馬達等が来倭して、「草堂を大和高市郡坂田原に結んで本尊を安置して礼拝した・・・」と記されているとのことである。これによれば仏教公伝以前から司馬達等などにより仏教が伝わっていたことになる。いずれにしても、馬子が司馬達等を配下することにより、仏教を普及させることができたのである。

\*それより筆者にとって重要なのは、石川の宅がどこなのかということである。現橿原市の石川なのか、それとも河内石川なのかである。筆者はこの石川の宅は河内石川で、稲目以前の蘇我氏の本拠であったと考えている。これについては、第5章で述べる。

## 《用明2年6月21日》

善信阿尼たちは、大臣（蘇我馬子）に語った。「出家の道は、戒律を守ることが根本です。願わくば、百済に行って戒律の法を習い、学び受けたいのです。」この月に百済の調の使者がやって来た。大臣は使者に語って言った。「この尼たちを連れて行って、お前の国に渡って、戒律の法を学び習わせろ。」

\*善信阿尼たちは崇峻3年に百済から帰って来て、桜井寺（向原寺・豊浦寺）に行き、滞在している。馬子の要求が実現していたことがわかる。

## 《崇峻元年》

百済国が使者と合わせて僧の恵総・令斤・恵寔たちを派遣して仏舎利を献上した。百済国は恩率首信・徳率蓋文・那率福富味身たちを派遣して調を献上し、仏舎利と僧の聆照律師・令威・恵衆・恵宿・道巖・令開たちと、寺工の太良未太・文賈古子・鑪盤博士の将徳白味淳・瓦博士の麻奈文奴・陽貴文・倭貴文・昔麻帝弥・画工白加を献上した。



蘇我馬子宿禰は百済の僧たちに請願し、戒律の法戒を問いました。善信尼たちを百済の使者の恩率首信たちに授けて、学問のために出発させ派遣しました。飛鳥衣縫造の祖先の樹葉の家を壊して、初めて**法興寺（飛鳥寺）**を作った。（この年は太歳戊申 588年）

「元興寺伽藍縁起」には、

戊申年（588年）初めて百済王昌王（威徳王）に法師及び諸仏を要請された。・僧侶、法師、路盤師、瓦師、書人ら十二名・・・作らせた人は、山東漢大費直麻高垢鬼・・・丙辰年（596年）十一月に完成した。・・・」と記されている。

\*この2つの記載によれば、蘇我馬子の要請を受けて、百済の威徳王が、寺工や鑪盤博士、瓦博士、画工などの技術者や僧を派遣し、仏舎利を献上したのである。

また、山東漢大費直については、倭漢氏の人物であって、飛鳥寺の建築・土木事業の監督を務めていたのである。倭漢氏は土木・建築以外にも軍事部門でも蘇我氏の忠実な配下にあった。4年後には馬子の命令で、東漢駒が崇峻大王を暗殺している。

### 【法興寺（飛鳥寺）と百済の王興寺との関係】

韓国の王興寺跡から掘り出された舍利容器には「百済王の発願で（王興寺が）577年2月に創建された」となっている。早稲田大学の大橋一章教授によると、「出土された瓦の文様と塔の構造などが飛鳥寺の遺物とほとんど一致する」とのことである。法興寺（飛鳥寺）は百済の王興寺をモデルに建立されたのである。完成したのはおそらく推古4年596年と思われる。鈴木靖民氏も「飛鳥寺創建は百済王と倭王の間の活発な交流を意味するもの」とする。

### 《推古4年11月》

法興寺の造営が終わった。（蘇我）大臣の男子・善徳臣を寺司とした。この日に慧慈・慧聡は初めて法興寺に行った。

\*崇峻元年588年に、蘇我馬子の要請を受けて、百済の威徳王が寺工や鑪盤博士、瓦博士、画工などの技術者を派遣してきたのである。また、馬子の子供が寺司となっている。馬子が、百済との交流を通じて、飛鳥寺の建立に中心的役割を果たしたのである。



飛鳥寺（元法興寺）と飛鳥大仏

《推古5年4月》百済の王は王子の阿佐（アサ）を派遣して朝貢した。

《即位7年秋9月》百済は、ラクダ1匹、驢（ロバ）1匹、羊2頭、白雉1隻を献上した。

＊ここでも百済との密接な親交が記されている。百済王権は、百済人の血を引いている蘇我氏が大臣であることにより倭国を信頼していたのであろう。

★王権や馬子と百済との関係はまだまだ記されているが、以後は省略する。稲目の時代以上に馬子と百済との強い関係がみてとれたであろう。次章では、本篇の本題の「蘇我氏の出自」について詳しく述べる。

## 5. 蘇我稲目の父は木満致の孫・母は昆支王の孫か？

### (1) 蘇我氏の本貫は河内石川

★(渡来人説を保留して)蘇我氏の本貫地は何処であったかを考えた場合、筆者が賛同するのは黛弘道氏の説である。少し長文になるが、黛弘道の説を紹介する。

『物部・蘇我氏と古代王権』吉川弘文館 黛弘道 2009年

「高麗までの系譜と、それ以降では断絶があるように思える。・・高麗と稲目の間に一つの断層があることは、認められるであろう。その理由とは、第一に稲目にいたってはじめて大臣となり、大和政権の中枢に位置を占めるようになったこと、第二に外戚となったこと・・・第三にソガ氏の枝氏を検討すると、高麗以前に分かれたものはわずか二氏にすぎないが、稲目の後と称するものは六氏を数え、前後に著しい差が認められることなどである。」

「第三について、稲目以前の枝氏は、川辺朝臣と高向朝臣の二氏であるが、その本貫地はいずれも河内国石川郡である。稲目の後と称する枝氏は、桜井朝臣、箭口朝臣、田中朝臣、小治田朝臣、岸田朝臣、久米朝臣の六氏で、いずれも大和曾我の近辺である。・・・また枝氏は本氏からの分岐にあたっては経済的独立を保証するため経済基盤の分与にあずかったのである。このような視点からソガ氏の枝氏分岐の様相を見るなら、稲目以前におけるソガ氏の政治経済的実力は微々たるもので、稲目にいたってその実力は飛躍的に向上したことがうかがわれるのであろう。」

また、その勢力微々なる時代の枝氏の本貫地が河内石川であることは、ソガ氏がかつて河内石川地方を本貫とした時期のあったことを推測させる。稲目の後と称する枝氏の本貫がいずれも大和宗我の周辺であることは、稲目の時に竹内峠をへて、河内石川から大和宗我に本拠を移したのではないか、それたまたま、安閑、宣化と欽明の両朝並立期で、大和政権が内部分裂により混乱していた時期である。稲目はその虚をついて、大和入りをはたし、欽明天皇支持の立場をとったのであろう。」

#### 《蘇我氏の枝氏》

「推古二十年二月、堅塩媛を檜前大陵に改葬する日、の儀式において、「大臣八腹臣等を率い

て、便ち、境部魔理勢を以って、氏姓の本を誅さしむ」とある。具体的な氏の名は境部臣しか知られない。・・・蘇我氏枝氏については、新撰姓氏録によるほかはない。

- (1) 石川朝臣：孝元天皇皇子彦太忍命之後なり
- (2) 田口朝臣：石川朝臣同祖 武内宿禰大臣之後なり 蝙蝠臣  
豊御食炊屋姫天皇の御世高市郡田口村
- (3) 櫻井朝臣：石川朝臣同祖 蘇我石川宿禰四世孫稻目宿禰大臣の後なり
- (4) 箭口朝臣：宗我石川宿禰四世孫稻目宿禰の後なり
- (5) 高向朝臣：石川同氏 武内宿禰六世孫猪子臣の後なり (河内長野市高向)
- (6) 田中朝臣：武内宿禰五世孫稻目宿禰の後なり
- (7) 小治田朝臣：同上
- (8) 川邊朝臣：武内宿禰四世孫宗我宿禰の後なり (南河内郡千早赤坂村川野辺)
- (9) 岸田朝臣：武内宿禰五世孫稻目宿禰の後なり、男小祚臣孫耳高  
居岸田村、因って負岸田臣号
- (10) 久米朝臣：武内宿禰五世孫稻目の後なり
- (11) 御炊朝臣：武内宿禰六世孫宗我馬背宿禰の後なり

・・・以上の考察からは、稻目の子が彼の在世中から没後にかけて、次々に分裂していったことが推測される。・・・

次に(5)の高向朝臣は、武内宿禰六世孫猪子臣の後とあるが、蘇我氏の本宗でみれば武内宿禰五世孫は稻目であるから六世孫は馬子となる。仮に猪子が馬子の兄弟なら、

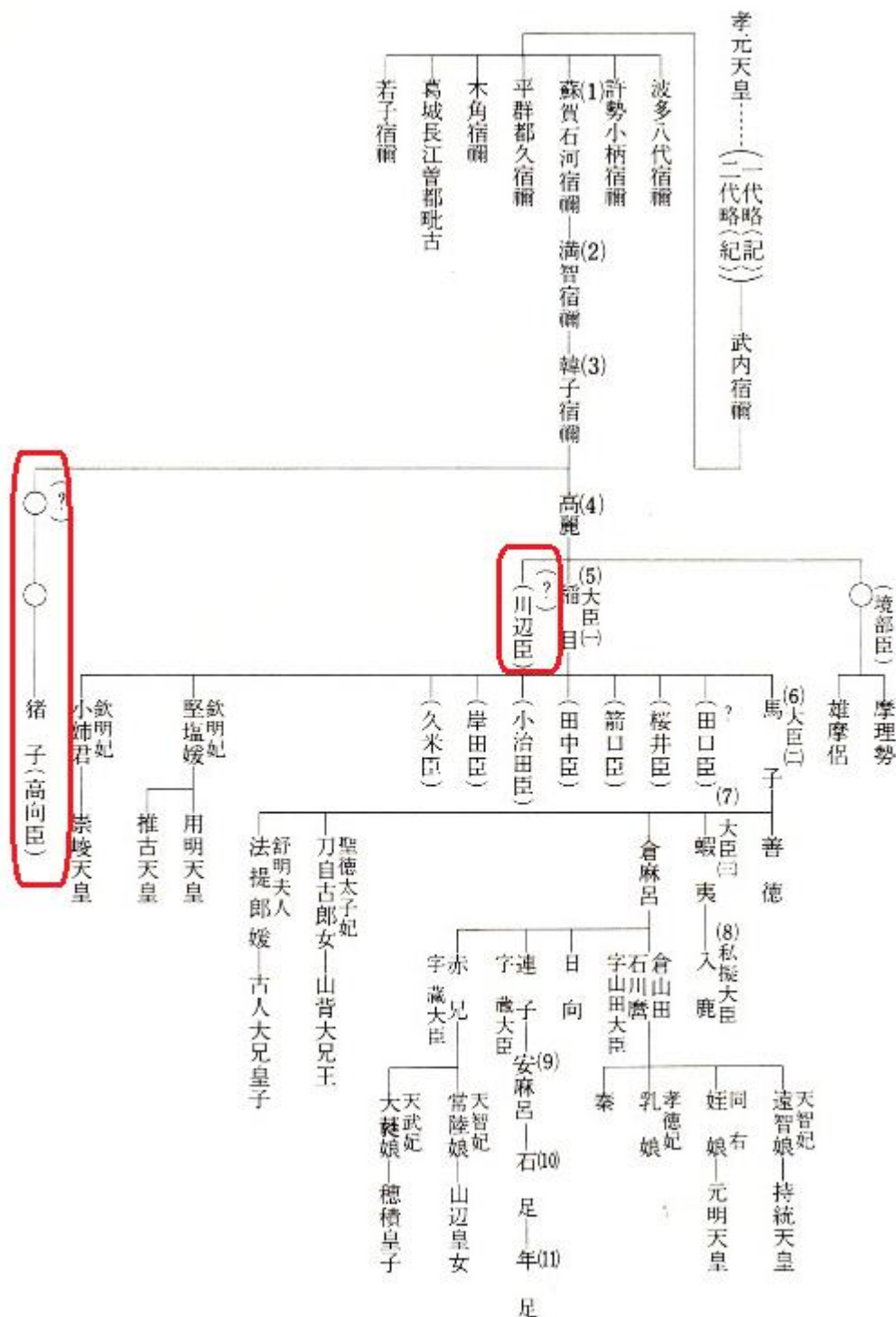
(3)以下の六氏と同様「稻目の後」と表記すれば済むことである。・・・そこで考えられるのは、高向氏が稻目一馬子の系譜に直線的につながる枝氏ではない、ということであろう。この問題を考えるために、(8)の川辺氏についてみておきたい。川辺氏は、武内宿禰の四世孫宗我宿禰の後なりとあるが、四世孫から考えれば、系譜上、高麗に相当するわけだが、なぜ宗我宿禰などと漠然とした表現をとっているかが疑われる。・・・少なくとも川辺氏は稻目の兄弟の後とはいえるだろう。つまりやはり、稻目一馬子の直系ではないのである。」

「ここで再び、高向朝臣に立ち返ろう。高向氏が、川辺氏同様、稻目の兄弟から出たとすれば、「武内宿禰の四世孫宗我宿禰の後なり」とされたであろうが、実際にそうなっていないところをみると、高向氏は、さらに一代前にした枝分かれしたのではないかと思われる。・・・高向氏は枝分かれはしたものの、経済的基盤が脆弱で、氏として独立するまでには至らず、・・・馬子と同世代の猪子に至り、本宗家の隆昌にともない・・・自立し得る基盤を獲得したと考えるかどうか。」

「前の表を観察すると、次のようなことが言えるのではないだろうか。すなわち

- ① 稻目以後の枝氏は、その数が圧倒的に多い。

- ②また、それらの枝氏の本貫推定地は、これまた圧倒的に高市郡近辺が多い。
- ③稻目以前の枝氏であることが確かなものは、高向・川辺の二氏のみである。
- ④また、それら二氏の本貫地推定地はいずれも河内である。



## 蘇我氏とその枝氏系図

(大和曾我説を元にすれば)・すなわち、蘇我氏は大和にあつて未だ勢力の微弱な時代に、遙か西方山を越えた河内に枝氏二氏を分出し、勢力が漸く増大するに及んで、その本貫地の周辺に枝氏を多数創出したということになる。しかし、このような発展のプロセスは常識は

ずれといわなければならない。それでは、蘇我氏の本貫「河内・石川」説によって、先の事実をみたらどうなるか。

蘇我氏は、その勢力の微弱な時代にあつては、本貫石川の近傍に枝氏二氏を分出するのみであったが、その勢いが漸く強大となるに及んで、(本貫を大和に移し、次いでその周辺に)枝氏を多数創始したということになる。かかる発展過程の想定が、前者より遙かに自然であることは、おそらく論を俟たないであろう。

ここにおいて、蘇我氏本貫「河内石川」説は、もはや動かぬところと思うのであるが、いかであろうか。

★以上、黛氏の論証は極めて納得でき賛同できるものである。稲目以前の蘇我氏の先祖は河内石川に居住していたことは間違いないことである。倉本一宏氏がいうような、蘇我倉石川麻呂の時代に河内石川へ進出したことではないのである。河内石川が蘇我馬子の時代にも蘇我氏の支配地であったことは日本書紀からもわかる。前章に示した敏達13年の記事を再度示す。

#### 《敏達13年》

・ ・ (馬子は) 仏殿を宅の東の方に作って、弥勒の石像を安置させた。 ・ ・ ・ ・ 司馬達等は仏舍利を齋食の上に得て、舍利を馬子宿禰に献上した。 ・ ・ ・ ・ また馬子宿禰は石川の宅の仏殿を修繕した。仏法の始まりはこれである。

★馬子が仏殿を修繕したとする石川の宅の仏殿は、後世に「石川精舎」とされるもので、『大和志』などに記されていて、橿原市石川町のこととされている。しかしその地域からは古瓦は出土していないので、河内石川説も候補地とのことである。馬子は仏殿を宅の東の方に作っている。馬子の宅はどこかはっきりわからないらしいが、飛鳥のどこかであることは間違いない。その飛鳥に近いところにもう一つの宅があったとは考え難い。飛鳥に仏殿を建てる前に、河内石川の蘇我氏の宅に既に仏殿が建てられていて、それを修理したと考えるのが合理的である。

## (2) 河内石川周辺は百濟人の居住地

★黛氏は蘇我氏渡来人説を否定されているが、蘇我氏の先祖の居住地が河内石川なら、蘇我氏百濟系渡来人説の可能性が一層高まる。河内石川は百濟王族や百濟系渡来人の居住地だったからである。これについて述べていくことにする

### ① 河内石川は昆支王およびその子孫の居住地

★百濟の昆支王が倭国へ来たことが日本書紀の雄略5年に記されている。

《日本書紀：雄略5年(461年)》

百濟の加須利君(蓋鹵王)が・ ・ ・ 弟の軍君(昆支王)に告げて『お前は日本に行き天皇に仕えよ』と。 ・ ・ ・ 加須利君は孕んだ女を軍君に与え、 ・ ・ 『もし途中で出産したら、母子同じ船に乗せて、どこからでも速やかに国に送るように』と言った。 ・ ・ 身ごもった女は筑紫の加羅島で出産した。そこでこの子を嶋君(後の武寧王)という。軍君は一つの船に母子を乗せて、国に送った。これが武寧王である。秋7月軍君は京に入った。既に5人の子があった。

——百濟新撰』によると、辛丑(461年)の年に街路王が弟の昆支王を遣わし、大倭に参向

させ、天王にお仕えさせた。そして兄王の好みを修めた。とある。

★その後、雄略 23 年 (479 年) に、百済の文斤王 (三斤王) が亡くなったので、昆支王の五人の子の中から第二子にあたる末多王は幼年ではあったが、筑紫の軍士 500 人をつけて百済に帰国させ、王位につけたこれを東城王とした。

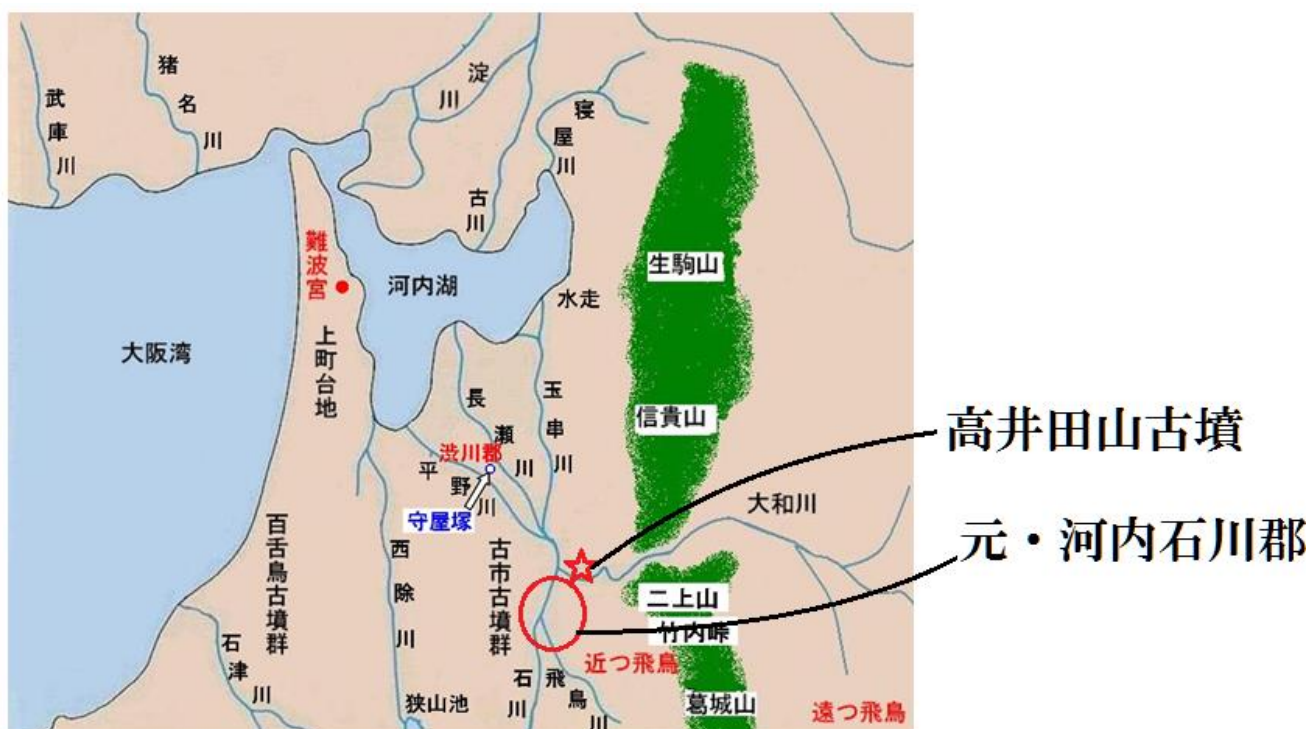
(三国史記でも 479 年、三斤王が死去したので、東城王が王位をついたとする。)

★嶋君は生れて母と共に百済へ帰ったが、昆支王と五人の子が倭国に来たのである。彼らが居住していたのは、河内飛鳥である。

(Wikipedia) 大阪府羽曳野市飛鳥に飛鳥戸神社がある。現在は素盞鳴命が祭神となっているが、百済王族・昆伎王の子孫である飛鳥戸造氏族の居住地であり、本来は飛鳥戸造の祖神として昆伎王が祀られていたものと考えられている。

★末多王 (東城王) を除く昆支王の子供たちも河内飛鳥周辺に居住していたことも日本書紀からわかる。

武烈 3 年の記事に「百済の意多郎王が亡くなった。高田丘に葬った。」と記す。大和志では、この「高田丘」は大和高田のこととするが、大和高田には丘がない。百済王族が住んでいたという史料もないので、それは間違いである。意多郎王の墓である「高田丘」は柏原市の高井田山古墳に間違いはない。石川が大和川に合流する地域である。(下図参照)



### 【高井田山古墳 (柏原市教育委員会)】

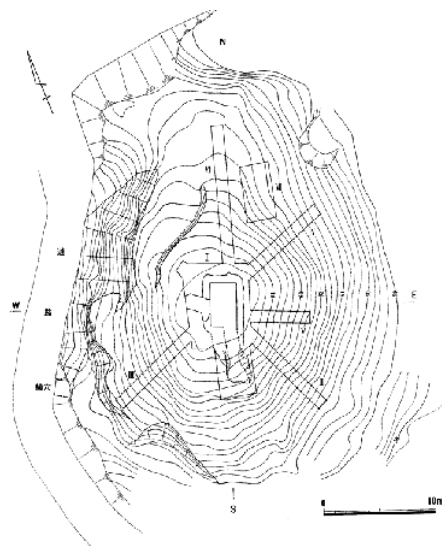
高井田山古墳の石室は、近畿地方で 6 世紀以降に展開する石室の原型として 大変重要な意義をもっています。この高井田山型のルーツは、形態や構造的な類似から朝鮮半島・百済の石室に直接求められますが、石室に葬られた 2 人は、仲良く並んでいることから、

おそらく夫婦ではないでしょうか。当時の日本にはそのような習慣はありませんでしたが、中国や朝鮮半島の王族らは、夫婦合葬が普通でした。このように、石室の形態、埋葬方法、副葬品、儀礼など、さまざまな点において朝鮮半島、そのなかでも百済との強い関係を推定することができます。しかも、火熨斗が武寧王の王妃の副葬品に一致することや、石室規模が百済の王陵に匹敵する大きさであることを考えると、高井田山古墳には**百済から渡来した王族クラスの夫婦**が埋葬されたのではないかと考えられます。

## 高井田山古墳<大阪府柏原市>



現在の石室内の様子



高井田山古墳平面図

★意多郎王が亡くなった武烈 3 年は AD500 年にあたる。百済の王族とすれば、意多郎王は、おそらく 461 年に倭国に来た昆支王の子のうちの誰かであろう。このことから、昆支王とその子供たちが、河内飛鳥または河内石川に居住してことは間違いのないことである。

【意多郎王が亡くなった後にも、百済王族が倭国に来ている】

《武烈 6 年》 百済国は麻那君を派遣して、調を進呈した。

《武烈 7 年》 百済王は期我君を派遣して調を進呈して、別に表を奉った。・・・

その期我には子がいて、それが法師君という。これは倭君の先祖である。

《継体 7 年 (513 年) 》 百済の (武寧王の) 太子の淳陀が亡くなった。

\*百済史料には太子の淳陀が亡くなったことは記されていない。武寧王の太子の淳陀が倭国に来ていたのである。(太子の弟の余明が王=聖明王となった。)

★上に記される、麻那君、期我君、法師君、太子の淳陀も、おそらく昆支王の子供たちの居住地である河内飛鳥に居住したのであろう。

### ②河内飛鳥には百済系渡来人の居住地でもある

★水谷千秋氏は、「『謎の豪族 蘇我氏』水谷千秋 文春新書 2006 」のなかで、次のように述べている。

「(渡来人の**王辰爾**の後裔である葛井氏、船氏、津氏、のうち) 葛井氏や津氏は安宿郡のちょうど西隣にあたる古市郡を本拠としていた。彼らと「～戸」姓の人々の戸籍は、ちょうどその隣郡にいた白猪氏や船氏や津氏が作成したものと見られよう。彼らは、**蘇我氏の指導の下**、その実務手腕を発揮し、各地の 屯倉において、農民たちの戸籍を作成したのであろう。」

「倭漢氏、鞍作氏とともに、**蘇我氏**とかかわりの深い渡来系氏族として逸することができないのが、百済から応神朝に渡来したとされる伝説上の人物、「王仁」の後裔を称する豪族たちである。…記紀ともに、この王仁(和爾吉師)が「書首等の始祖」であると記している。「書首」とは河内国古市郡に勢力を張った西文氏のこと、……(古語拾遺の)記事の信憑性には一部疑問があるが、……それでも六世紀のある時期より、**西文氏が蘇我氏の指導の下**、学問、文筆、のほか、朝廷の倉庫の出納やその記録を担当していたことは認めてもよい。現在、羽曳野市の西琳寺は、その縁起によると、欽明朝に文首阿志高が創立したと伝えられている。年代の信憑性は別としても、この寺が西文氏の氏寺であることは疑いないであろう。」

「……こうした擬制的な同族(王辰爾)の後裔氏族の葛井氏、船氏、津氏)も含めて、これら王仁後裔氏族の多くは、河内の古市郡、丹比郡を中心とするなか、中、南河内地方を本拠としていた。…」





★つまり、欽明大王時代において、蘇我稲目の配下としてはたらい王辰爾は河内を本拠にしていたのである。筆者は、稲目がどのような経緯で王辰爾と関係をもったか疑問であったが、この水谷氏の記述からそれが解けることになった。稲目以前の蘇我氏の祖が河内において王辰爾と関係をもっていたのであろう。同じ蘇我氏の配下であった東漢氏の場合は、日本書紀の記述からは稲目の時代には蘇我氏の配下になっていないことがわかる。東漢の本拠地は飛鳥に隣接する檜前であるが、稲目が飛鳥に進出したとき、蘇我氏と東漢との関係は薄かったと考えられる。その後、蘇我氏が東漢氏の発展を支えることにより、東漢氏は蘇我氏の配下になったと合理的に推察できる。

★なお、王辰爾一族や王仁系氏族の墓と考えられている古墳群として一須賀古墳群がある。

【参考：一須賀古墳群（web・国指定史跡ガイド）】



大阪府南河内郡太子町葉室から河南町一須賀・東山にかけての丘陵上に点在する古墳群。270基にのぼる古墳は大半が小規模な円墳で、他に少数の方墳があり、それぞれ数基から数十基ほどにまとまって造営されている。円墳は径15mから20mの小規模なものが多く、木棺直葬の主体部をもつ数基以外は、横穴式石室を埋葬の主体部としている。石室内には石棺あるいは木棺を2ないし4基置くことが多く、副葬品では竈(かまど)と甑(蒸し器)のミニチュアの炊飯具が特徴的である。出土した須恵器からみると、古墳の築造は6世紀の前半に開始され、7世紀初頭から前半には終焉をむかえたと考えられる。祭祀具としてのミニチュア炊飯具から、この古墳群の造営に渡来系氏族がかかわっていたと推定される。磯長谷から一須賀古墳群のある石川東岸一帯は近つ飛鳥とも呼ばれ、6世紀のころに百済系の渡来人集団が定着した地とされているが、同じころ、大和政権の新たな勢力として台頭してきた蘇我氏とこの地域との密接な関係もよく知られている。

### ③河内石川と百済との深い関係

★百済王族の来倭の他にも、河内石川と百済との関係が日本書紀に記されている。

《仁徳41年》 紀角宿禰を百済に遣わして……このとき、百済王族の酒君が無礼であった。……百済王は酒君を鉄の鎖で縛り、葛城襲津彦に従わせて進上した。

酒君は石川錦織首許呂斯の家に隠れた。

#### 《雄略2年》

百済の池津媛は、天皇が宮中に入れようとしておられたにも関わらず、石川楯と通じた。天皇は大いに怒って、大伴室屋大連に命じて、久目部をつかい夫婦の四肢を生に張り付けて、**棧敷の上に置かせて、火で焼き殺させた。**

\*この2つの記事が真実とは思われないが、何かの史実が元になったと考えられる。

\*さらに、敏達12年には、倭系百済人の日羅が殺された後、その妻子を「**石川百済村**」に住ませたという記事もある。河内石川が百済人の居住地であったことは間違いない。

### (3) 蘇我氏の祖は百済王族と木満致か

★上の2つの節で述べたことをまとめると次のようになる。

\*河内石川は稲目以前の**蘇我氏の本拠**であって、稲目の代に大和飛鳥に進出した。

\***百済王族**の居住地であった河内飛鳥は河内石川と同じ地域であった。

\*河内飛鳥は**王辰爾**一族や**西文氏**の本拠でもあった。

また、第4章で述べたことも示す。

\***蘇我稲目**は宣化・欽明大王のときに、**突然**大臣に就いた。

\*蘇我稲目は**百済系渡来人**の王辰爾を配下にし、**蘇我麻智宿禰**は西文氏を配下にしていた。

\*蘇我稲目・馬子の親子は百済との関係を強め、百済もそれに応じた。

★これらより考えられることは、次のことである。

(i) 稲目が百済系渡来人の**王辰爾**を配下にしたことは、王辰爾にとって稲目は従うべき貴種だった。

(ii) 百済が、蘇我氏の求めに応じると共に蘇我氏との関係を深めたことは、百済にとって、蘇我氏は信頼できる氏族だったからであろう。

蘇我氏の先祖は百済官人の木満致であったことは、既に論証したが、蘇我稲目は木満致の三代後の人物である。単なる木満致だけの子孫であったなら、「王辰爾が稲目の配下になったこと」や「百済が蘇我氏を信頼していたこと」は考え難い。

\*稲目以前の蘇我氏の本拠地と、百済王族の居住地は、同じ河内飛鳥・河内石川である。蘇我氏の先祖と百済王族との親交がなかったはずはない。両者が婚姻関係を結んだ可能性は極めて高い。つまり、蘇我氏の出自について結論できることは、「**蘇我氏には百済王族の血が入っている**」ということである。

★この筆者の説を元にして、百済王族と蘇我氏との婚姻についての仮説を述べることにする。

まず、第1章で述べたように稲目の生年は506年ころである。一方、昆支王の子供と考えられる意多郎王は500年に亡くなっている。意多郎王には、妃がいたことはわかっているので、その女子が存在したと推測する。日本書紀に意多郎王の死を唐突に記しているのは、何かを暗示しているように感じる。それは隠された蘇我氏の先祖のことであった筆者は考えるのである。意多郎王は461年には幼少だったので、亡くなった500年ころは50歳前後だったと考えられる。よって意多郎王に女子が生まれていたとするならば、その女子の年齢は500年では、20歳前後であっただろう。稲目

が生まれた 506 年には 25 歳前後になり、結婚・出産の適齢期である。つまり筆者は、稲目の母は昆支王の孫娘であった可能性があると考えているのである。ただし、稲目の母は意多郎王以外の百済王族の女子の可能性もある。しかしながら、「蘇我氏には百済王族の血が入っていた。」ことは間違いないと考えている。ひょっとしたら、雄略 2 年の『百済の池津媛と石川楯と通じた』記事は、昆支王一族が石川に住んでいたときのことで、『池津媛＝昆支王の女子と石川楯＝蘇我氏の子とが結ばれた』ことを元にしたのかもしれない。ただし、これは単なる推測に過ぎないが・・・「蘇我氏には百済王族の血が入っている」ということは真実と考えている。

★蘇我氏が昆支王の末裔とすることは、黒岩重吾氏も述べている。これも少し長くなるが、重要なことなので、紹介する。「黒岩重吾『古代史の迷路を歩く』中公文庫 1986 年」

(1) 「私が、蘇我氏は百済王族ではないかと考えるようになったのは、東（倭）漢氏を始め渡来系の氏族が蘇我氏を主君と仰いでいたのと、蘇我氏が出現して、朝鮮、特に百済との交流が密接になり、仏教、学問などの文化の輸入が画期的な展開を見せたからであるが、門脇禎二氏の示唆に負うところが多い。最初は漠然と百済系の渡来人であると考えていたが、最近、百済王族ではないかと思うようになった。理由は色々あるが、一番有力な動機は、雄略時代の、物部氏と並び権勢のあった東漢氏が、王朝交代のあった継体以降、蘇我本宗家を自分たちの君主と仰ぎ仕えた気配が濃厚だからだ。・・・東漢氏は、「記紀」の伝承からみて、明らかに蘇我氏より先に渡来し、倭国内で権力を得ている。それなのに、何故、蘇我氏を主君と仰ぎ仕えたのだろうか。考えられる理由は一つしかない。後に渡来してきた蘇我氏が百済王族、それも王位継承権をもった有力な王族だったからである。それを知っていればこそ、東漢氏は蘇我氏の部下になったのだ。

ところが、不思議なことに、この東漢氏の主君になった蘇我氏について、記紀はその十分の一も述べていない。・・・東漢氏の説話と比較すると雲泥の差である。・・・時の権力者によって（蘇我氏の）重要な部分が、意識的に抹殺されたのである。」

(2) 『三代実録』に記述された石川宿禰は、河内石川で生まれているが、これは河内石川に渡来した蘇我氏の祖で渡来系の首長と解したい。その首長こそ、すぐ傍の竹内街道を通り、大和葛城に入り、滅亡した葛城本宗家の領地を雄略から貰った蘇我氏の祖なのである。葛城地域や高市郡に住んでいた東漢氏が蘇我氏を主君と仰いだのは、蘇我氏が高貴な血筋の氏族だったからである。・・・『古語拾遺』によると、雄略時代、阿知使主と河内文氏の王仁に管理させていた齊蔵、内蔵のほかに、大蔵を置き、紀に出て来る蘇我満智宿禰に三蔵を統括させたが、絹の朝貢が増えたので、大蔵を置いた、という。秦氏は新羅系とされているが、ここで注意せねばならないのは、蘇我氏が渡来系氏族の長になっていることだ。・・・蘇我氏は渡来系氏族が文句なしに服従せざるを得ない血統の持ち主だ、と考えなければならない。

(3) 昆支王は間違いなく 461 年倭国に来たのだ。ところで昆支王は何処に住んだのか、河内飛鳥である。河内飛鳥に「飛鳥戸神社がある。この神社は昔は昆支王を祀っていた。というこ

とは、河内飛鳥、石川一帯の首長となったのは、百済王族昆支王なのである。彼は百済の王位継承権を持った王である。・・・当時、百済は高句麗と争っており、倭国と親交を保つことが必要だったのだろう。いってみれば、昆支王は重大な使命を帯びて、倭国に来て、河内飛鳥に住んだ。・・・日本書紀によれば、雄略は昆支王の五人の子供のうち末多王をかわいがった、としか述べられていないが、私は河内飛鳥の首長になった若き昆支王は、倭国と百済の国際関係、倭国の政治に関与して活躍した、と考えている。・・・

(4)「私の眼には、二重映像のように昆支王と蘇我韓子がダブルのである。だからといって韓子が実在の人物というのではない。韓子は朝鮮で紀大磐宿禰に殺されているが、彼は創作上の人物か、ひょっとすると昆支王の子供かもしれない。・昆支王の王子たちは百済に帰った末多王と武寧王を除き、倭国の河内飛鳥にいて活躍したはずだ。」

(5)「蘇我氏は河内飛鳥から葛城に移り大和の飛鳥を開いた。蘇我氏なくして大和の飛鳥は語れない。523年百済の聖明王となった武寧王の子が倭国にいる伯父、叔父（稲目）と親交を結んだのは当然である。

その後も蘇我氏が勢力を拡張することができたのは、百済という味方があったからである。通説では理数に明るく先進文化の吸収に熱心な氏族だったから権力を得たというが、本末転倒もはなはだしい。蘇我氏の祖が百済王族であったからこそ、理数に明るく先進文化を吸収出来たのである。」

(6)「ここで今、一度蘇我氏の系譜をみてみよう。古事記や公卿補任などをもとに蘇我氏の系譜を作ると、次のようになる。タケノウチスクネー曾我石川宿禰—蘇我満智宿禰—韓子—高麗—蘇我稲目である。タケノウチスクネは、創作された人物だから問題にならない。石川宿禰は石川在住の勢力の首長という意味である。満智宿禰は木苧満致であろう。韓子、高麗は渡来系の人物を暗示する名前である。この系譜を先入観なしに眺めたなら、稲目の祖が渡来系氏族であることがはっきりする。朝鮮と関係があったから、韓子、高麗と名付けられたとする通説は真実から目をそらせている。問題は蘇我満智である。私は木苧満致の来倭を否定しない。木苧満致は蓋露王の高級官人であり、昆支王は蓋鹵王の弟である。昆支王の王子たちを470年代に渡来した木苧満致は、当然親交を結んだであろう。おそらく婚姻関係を持ったのであろう。とすると、蘇我氏の始祖伝承に木苧満致が入っていたとしてもおかしくないのである。」

(注：黒岩氏は、後に出版された本では、はっきりと「木苧満致が昆支王の娘たちの入り婿になった、そして蘇我氏を継いだのではないか・・・」と述べている。)

(7)「巨勢、大伴、物部氏などの後に出た新興豪族の蘇我氏が、大和の一豪族であったなら、幾ら理数に勝れた土族であっても、大王家をしのぐ勢力を持つことは不可能である。矢張り蘇我氏の祖は王位継承権を持った百済王族、昆支王の王子で、最初の本願地は河内飛鳥であっ

た、と考えたい。後の宗我も、我を宗とする、という意味だ。誰に対してそう名乗ったのだろうか。いうまでもなく、百済系渡来人に対してである。」

★以上の黒岩氏の説は、一部を除いてほとんどが、筆者の説と同じである。また、筆者が書くことができなかったことをしっかりと書いてくれている。蘇我氏が百済王族の末裔であることを確信することになった。

## 【終わりに】

★倉本一宏氏と水谷千秋氏は、「一般古代史ファンのなかに渡来人説が根強く存在していること」について、放置できないことを書いておられる。これに対する強い抗議の意思を述べておくことにする。

①まず倉本一宏氏であるが、「朝日新聞・2016年4月28日」において、「蘇我氏に対する思い込みと実像」という見出し文の最後に、次のように述べておられる。

「……また、蘇我氏は元来、決して旧守的な氏族ではなかった。それどころか、蘇我氏は倭国が古代国家へ歩み始めた六世紀から七世紀にかけての歴史に対して、もっとも大きな足跡を残した先進的な氏族であった。なお、かつて提唱された「蘇我氏渡来人説」が、学会では完全に否定されているのに、一般の方々や一部の著作において、いまだに語られるということは、如何な者ものかと思う。日本人の潜在意識の中に、「悪行（特に天皇家への不敬行為）を行うのは外国人に違いない」という思い込みが、現在でも存在するとしたら、まことに困った事態である。テレビのニュースなどで、「犯人は外国人風の男」などと報じられることがある。それが思い込みや偏見でなければよいのだが。」

★これを読んで、筆者は極めて不愉快な気分になった。「蘇我氏渡来人説」をとる一般古代史ファンが「悪行（特に天皇家への不敬行為）を行うのは外国人に違いない」という思い込みをもっているように書いておられる。これは古代史ファンを侮辱する許しがたい発言である。門脇禎二氏・鈴木靖民・山尾幸久は外国人悪人感から渡来人説を唱えられたのではない。筆者や筆者が知っている「蘇我氏渡来人説」の古代史ファンも、決して「外国人悪人説」から蘇我氏渡来人説をとっているのではない。様々な史料を検討することによって、蘇我氏の祖が渡来人と考えるのである。そもそも古代史ファンが自分たちと異なる説を取っている理由として「外国人悪人感」を持ってくることは、極めて卑怯な発言である。「(渡来人説) 学会では完全に否定されている」のに、「一般の方々や一部の著作において、いまだに語られる」ということは、学会の説が間違いとは考えないのであろうか。学会の説が必ずしも正しいことではないことは倉本氏も理解しておられるはずである。何が何でも渡来人説を否定したいという倉本氏の気持ちが感じられるのである。邪馬台国所在地問題でも、9割以上の考古学者は畿内説であるが、一般古代史ファンの過半数が九州説である。蘇我氏渡来人説は、邪馬台国九州説と同様に、学会ではほとんど否定されているが、真実であると筆者は考えるのである。

②水谷千秋氏も「渡来人説の背景」との小見出しで、次のように述べている。

『謎の豪族 蘇我氏』水谷千秋 文春新書 2006』

「・・・蘇我氏＝渡来人説が学会だけでなく、一般の古代史ファンの間でも広まり、いつの間にか多くの人達にとって通説のように理解されてきたのはどうしてだろう。右に述べた学問的な理由だけではないと思う。この説を最初に唱えた先学にその意図がなかったことはいうまでもないが、蘇我氏渡来人説が一般に信じられてきた背景には、この説が古くから日本人に定着してきた蘇我氏逆賊史観とうまく適合していたことがあるのではないだろうか。つまり「蘇我氏は渡来人で天皇への忠誠心が薄かった。だから天皇をないがしろにし、これによって代わろうとしたのだ」という理解である。こういう理解が、知らず知らず多くの人の胸にあったのではないだろうか。そうだとすれば、今も、蘇我氏逆賊史観は我々の心を領していることになる。古い先入観から脱することの難しさをあらためて思い知らされる。」

★この水谷氏の言及も倉本氏と同様、我々古代史ファンに対する不当な発言であると感じている。日本書紀の乙巳変前後の記述は「蘇我氏逆賊史観」を思わせる記述であり、「蘇我氏逆賊史観」を誘導してきたのは一部ではあるが、むしろ戦前からの学会の方々であったのではないか。

(最近になり、ようやく蘇我氏悪人説が払拭されるようになってきていることは、好ましいことである。)

上の倉本氏批判でも述べたが、蘇我氏渡来人説の古代史ファンの多くは、蘇我氏逆賊史観から蘇我氏渡来人説をとっているのではない。そのことは水谷氏自身も認めていることではないか。

「これまで蘇我氏渡来人説が力を持ち続けたのは何故だろうか。それはこの説をとれば、この氏族の国際的な開明性―仏教伝来を推進したり、倭漢氏などの渡来人を配下にもっていたことなど―がうまく説明できるといったことにあったように思う。」と水谷氏も述べているのではないか。

つまり、蘇我氏渡来人説は、決して蘇我氏逆賊史観から支持されているのではない。様々な史料を最も合理的に説明できるものであることから、その説が古代史ファンに支持されているのである。

★倉本氏や水谷氏のように「外国人悪人感」や「蘇我氏逆賊史観」から、古代史ファンの蘇我氏渡来人説が支持されているというなら、逆に、「蘇我氏倭人説」は、天皇中心史観が元にあるとも言えることになる。つまり「**天皇の外戚となって権勢を極めた蘇我氏が外国人であってはならない**」という史観である。事実、ある学者はある講演会で、「崇峻天皇は殺されてはいない、幽閉されただけである。天皇は殺されるはずがない」と語っていた。

★蘇我氏渡来人説を否定している学会には、(以前にも述べたが)何かの力がはたらいていると筆者は感じている。蘇我氏渡来人説を十分な検証をすることなく切り捨てて、葛城説や高市郡曾我説を弱い根拠でもって唱えていることからである。古代史ファンは学者にとっても大切なはずである。共に**自由で開かれた古代史議論**が出来ることを期待している。

\*次回は継体～欽明時代に記されている「任那」と「日本府」について述べる。

以上